令和５年８月 18 日、９月 21 日　いいだ未来デザイン会議

いいだ未来デザイン 2028 戦略計画「2022（令和４）年度」の評価についての意見交換の内容

いいだ未来デザイン会議委員からのご意見・ご提案	ご意見・ご提案に対する回答
＜基本目標１　稼ぎ、安心して働ける「魅力ある産業」をつくる＞ 【河野委員】 ・どこの企業も人材不足で悩んでいる。高齢者の活用という点で取り組んでいることはあるか。 【高橋委員】 ・マイクロツーリズムで地元の良さを再発見してもらう取組を行っている。飯田市の人は奥ゆかしい部分があり、飯田市にこれといった魅力はないと言ってしまいがちである。一番の目的は、実はすごく良いところ、誇れることが多くあることを地域の人に理解し、外の人へ伝えてもらうことである。 ・６月～７月は観光需要が落ち込んでいたが、夏休みに入って復活してきており、観光は日常生活に欠かせないものになっていると感じる。知恵を絞って、大型観光施設に負けない魅力を捉えて打ち出していくことが大切だと考えている。 ・修学旅行はコロナ禍前の状態に戻りつつある。高齢者の方にも農家民泊などに協力いただいている。食事は地域の飲食店に協力をしていただき、お弁当などで対応できているが、大型ドライブイン施設が閉鎖されたことにより、200 人超規模の人が入ってお土産を買っていけるところがない。年間で何千人という人が来てくれるなかで、お土産を買う機会を失っていることは残念であり、２泊３日の旅行で、お土産を買う場所がないために、３日目の朝には南信州を離れていくことになってしまっている。天龍峡の広場がそういう役割を今後果たしていけると良い。 【河野委員】 ・群馬県の高崎市では、長野県は物凄い人気がある。特に軽井沢のツルヤはすごい人気がある。そこに行くと長野県のものが買うことができる。ツルヤはとても長野県ブランドを上手に使っている。南信州全体としてフルーツや半生菓子などをうまく売り出していけば、とても魅力があると思う。 ・南信州というナンバープレートになることに反対する声も聞いたことがあるが、「南信州」という言葉の語呂はとても良いし、印象もとても良い。 ・観光という点でも魅力があり、道の駅などはどこも工夫している。もっともっと工夫すれば、人を呼び込むことができる。小諸での例でいえば、Ｐａｒｋ－ＰＦＩで行政が土地を貸して民間が建物を建てることで、誰も行かなかったところが大盛況となっている場所がある。市だけでなく、民間の知恵を使うなど、	【清水産業経済部長】 ・高齢者の活用について、戦略計画の中で旗を掲げて取り組んでいるということはないが、定年延長ということはある。また、地元資本のスーパーではレジ職員に高齢者を配置することで、利用者も高齢者が多いことからより良い対応ができて好評だと聞いている。高齢層の人材活用が重要という認識はある。

リニア駅周辺もプロポーザルで民間に任せてしまうなどすればもっと良いアイデアが出てくるのではないか。この地域の観光での集客力は物凄いものがあると思う。 【中村委員】 ・この地域は特色ある農業が盛んで、長野県の中でも変わっている。特色ある農業で人を呼び込むことも大事だと思う。 ・地域全体で農業が儲からないという印象を持ってしまっている。農業には様々な分野があり、ビジネス、健康、趣味、家族がやっていたのでという義理の農業もある。全体が「農業」として捉えられてしまっている。ビジネスの農業であれば、儲かるだけの収益がある。りんご狩りの季節には松川や飯田インターなど、かなり渋滞している。 ・この地域は、各農家の土地が小さい。特徴を生かしていかに出荷していくかが重要。 ・飯田市には支店を出す企業が少ないため、食の需要が弱い部分がある。企業に来てもらい、街がにぎやかになることで食の文化が活発になると、地域の食というものが発達する。外の企業に一本釣りで卸すよりも、地元に買ってもらった方が圧倒的にコストをかけなくて済む。 ・南信州はモノの質が良いので、売値が高くなっている。南信州牛というととても高くなっているため、なかなか口に入らない。果物も高い。そのため、なかなか県内の店舗に出すほどまで値段を下げられず、名古屋や東京が主な販売先になってしまう。飯田にもっと企業が来てもらう必要がある。 【今井委員】 ・資源が豊富にあることは分かっているが、何か１点突破で発信していく必要がある。10 人が別々に発信していても、なんでもあるところだという印象しか残らない。それよりも、例えば焼肉１本で走ってみる。そこから広がるマーケットがある。みんなが口をそろえてアピールできる何かを作っていく必要があるのではないか。 ・自然と人のやさしさとおもてなしのホスピタリティは、この地域の資源。この地域に来てもらえれば、また来たくなる地域だと思う。絞り込んで戦略を立てていくことが必要。 【福澤委員】 ・いろいろあるところを並べても確かに魅力は伝わりにくい。誰がどのように選別していくか。知見のある方が議論して決めていくものと思う。 ・ＫＰＩについて、きっちり事業計画を立てられて設定されていることは素晴ら	【林】 ・いいだ未来デザイン 2028 では、目指すまちの姿を掲げ、その実現に向けて中期計画では 13 の基本目標に取り組んでいる。それぞれの基本目標の進捗状況を確認する指標として、また、今の飯田市の現状を知るための指標としてＫＰ

しいことだと思う。より向上させていくことが大事だと思うが、小戦略を取り組んでいくことでＫＰＩの数値が向上していくことになるのか、ＫＰＩの建付けについて教えていただきたい。 ・基本はツリー構造になっていて、それぞれ下の方から分解して各ファクターを積んでいくことで向上していく仕組であるべきで、足りていない部分ではないか。 ・定性的な取組を、より数値化して取り組むべきで、数値化した目標が達成されたかは大きな問題ではなく、何を指標としてその数値の変動をどのようにとらえるかが重要。そうしないと、共通認識として何に取り組むべきなのかが分からないのではないか。 ・焼肉ロックフェスでは、人気アーティストを呼んですごいイベントであった。人流を見てみると二日間で 4,000 人弱であった。2023 年ではそうだったという数値が取れれば、来年は 10%、20%増しにしていこうという具体的な目標が立てやすい。20%増しにするためには、何をどこにどう訴求していけばいいかを分解していくことで、より建設的な議論ができる。 ・人流データをもっと見ていくと、どこの地域から来ているかを見られる。今回では、中部地方からは来ている人がほとんどで、関東からは来ていないことが顕著に分かる。そうすると関東に向けて広告を打つべきではないかということが仮設としていえる。数値的な把握をした上で、話をしていけると良いのではないかと思う。 【竹内委員】 ・長期的なことでは、リニアの開通が一番影響ある。まだまだ知名度が低いこの地域をいかに知ってもらえるか。観光を使って、この地域のブランド化をいかに行うかが大切。 ・この地域の素材をどう使っていくか。市田柿のブランド力をもっと発信していっても良い。この地域は非常に特徴的な農産物があるという話もあったが、まだまだ地元の人間がこの地域の魅力を分かっていない部分がある。自分たちが知っていないとＰＲもできないので、観光や農産物などをブランド化しながら発信していけるようになると良い。	Ｉを設定している。ＫＰＩは、基本目標の達成度を計るだけでなく、現状に対してどのような取組をしていくか（小戦略）を考える指標としても位置づいている。 【清水産業経済部長】 ・プロジェクトベースでは、定量的な目標を立てて事業を実施している。具体的な話で言えば、先ほど話にもあったＫＤＤＩの人流データの活用など、得難い情報をいただいている。その中でも、ボトルネックとなっていた部分が、焼肉ロックフェスに全国から来たいと言っていただいても、飯田市に宿泊する場所がないこと。宿泊先は全て満室になってしまい、行きたくても来られなかったという話を聞いている。プロジェクトベースではしっかりと分解して数値

	的な把握をぜひ進めていきたいと思う。 ・農産物については、飯田の農産物が高いことは良いことだと考えている。市場でも人気があるということ。しかしながら、地元の人がしっかりとそのことを認識していないということがある。地域の人にも魅力があることを認識してもらい、リニアや三遠南信道が開通した際には、自信を持って言ってもらうようにしていかないといけない。そういった中で、観光公社にも、南信州こだわりの旅をやっていただいて、地域内外の方に魅力を伝えていただき、特に地域内の方には新しい発見ができる取組を行っていただいている。
＜基本目標２　飯田の魅力を発信し、つながる人を増やし、飯田市への人の流れをつくる＞ 【小林委員】 ・どこの企業も人が足りない。更にきつくなることが予想される。ＵＩターンの若い人材を多く確保していきたい。特にＵターンに期待したい。どうやって確保していけばいいか。	【橋本市民協働環境部長】 ・当地域の高校卒業後の県外の大学等への進学率は約７割、回帰定着率は約４割。地元企業を知らない方（学生）も多い。地元企業のＰＲをしっかり強化していきたい。 ・飯田職業安定協会では、当地域にある企業を紹介するＨＰ「イイダカイシャナビ」を更新し、情報発信を行っている。 ・結いターン移住定住推進課では、企業のインターンシップと地元の暮らしをセットで体験できるように、「結いターンシップ事業」という新たな補助制度を設けた。
【佐々木委員】 ・「新規大学等卒業者の地域内就職率」のＫＰＩの数値は減っていないように見えるが、下伊那も含めると相当減少している印象を受ける。地域のイメージアップに向けた情報発信や結いターンシップが大事なことも分かるが、都市部と地方との初任給の格差が開き過ぎている。若者の所得を意識した対応を考えていかないといけない。	【橋本市民協働環境部長】 ・企業の賃金について、行政が支援することは難しい。 ・１番は就職したいと思えるやりがいのあることが大切。学生や就職希望者のやりたいことや自由な発想で仕事ができるような環境を整備することも必要。
【三浦委員】 ・約 10 年前に高校のクラスで長野県に就職したのは長男だけだったが、その後、ほとんどの子が帰ってきた。しかし、親が会社を経営している人は定住したが、それ以外の人はまた外に出て行ってしまったと聞いた。 ・都会に就職し、帰ってきた子を飯田が受け入れることができなかった。飯田で住むことのメリット、豊かさを親や地域が与えられなかったことが大きな原因。Ｉターンも大事だが、帰ってきた子を飯田に引き付けておく手段を作ることが大事。	【橋本市民協働環境部長】 ・Ｉターン施策を進めているが、地元出身の人が帰ってくるＵターン施策も大事。帰ってくるためには、就業先は大きな要素になってくる。 ・高校生を対象にキャリア教育にも力を入れている。今後もしっかりやっていきたい。

・大学で自分が専攻したものが、飯田に就職先としてない。 ・やりがいや飯田に住むメリットを子どもたちに見つけさせてあげたい。企業のことも知らない。今、学校で企業の紹介も増えている。知っていると、帰ってきた時に思い出してくれるので大事。 【増田委員】 ・仮に結婚していると、男性はある程度収入がほしい。今の時代、ここに住んでいても東京で働ける。ここにしかないテレワークオフィスが必要。 ・女性は選択を迫られる人生。結婚、子育てと仕事の両立、介護等どこにも相談の場所がない。女性のトータルを相談できる場所が飯田にない。働いている女性同士の交流がない。 ・飯田下伊那で生き生き働いている女性を、大学生に知ってほしい。 ・情報公開やＰＲの仕方を女性や年代に特化することが必要。 【荒井委員】 ・仕事や金銭面に関してもＵターンは受けられていない印象。例えば移住の支援金でも、Ｕターンの支援金はなかった。県の補助金制度も対象地域が限られている。 ・学歴が高い人は困るという地元の中小企業が多い。高校のクラスで地元に帰ってきたのは医療系、行政へ就職した。 ・飯田高校の学生はキャリアガイダンスへの参加が少ない。地元に就職することに関心がない。 【三浦委員】 ・都会から飯田に来ると定住してくれると思うが、若い人たちは、自分が好きな時代に好きな場所で生きる感覚がある。移住をした人が定住しているか調べているか。 【増田委員】 ・以前の飯田下伊那は市民活動がカバーしていた。今は個に特化している時代。何がその人にとって魅力があるのか分散している。新しいものの方が飛びつきやすい。 ・女性活躍と言われると女性の中でも反発する気持ちを持つ方が多い。そういう人たちが集まる場所がない。ただ語り合うだけの場所があるといい。どこに呼びかければアプローチできるか難しい。仕事や子育ての話が聞ける場所があると帰って来てくれるのでは。 ・子育てをしていると母親同士でつながりがあるが、結婚や子育てをしていない	【橋本市民協働環境部長】 ・飯田は男性の方が戻ってくる率が高く、女性の方は戻ってくる率が低い。女性は戻って来ても自分の居場所がないことが大きな要素としてあるのかもしれない。 【橋本市民協働環境部長】 ・自分を迎え入れてくれる居場所づくりが必要。行政がそういう場所を作り、支えていくことも必要か。

女性が孤立している。

【杉山委員】
・改めて飯田の魅力は何なのか。これから未来に向けて飯田は何を発信していくのか改めて考える機会。
・移住者の取り合いになっている。飯田市は、かつては環境や再生可能エネルギーの先進的な取組が光っていたかもしれないが、その先進性も埋没気味で、今日本全国いろんな地方都市がやり始めている。ＳＮＳ、動画等いろんな配信方法を使い、どんどん上書きされている。今というよりこの先の未来どうしていきたいのか。
・今多様な生き方がある。夢が実現できるまちになっていくと、例え一生住まなくても、暮らしてみたい、子育てをしてみたいと思える、夢が実現できるという魅力を発信できると素敵。生き方のいろんな事例を発信することも一つの魅力になる。

【福岡委員】
・自分もＵターンした。自分の故郷で生活すると自分に根が生えているイメージ。飯田で育ったのであれば、飯田で活躍してほしい。
・地域の企業は人が不足している。企業の立場としても、ＰＲ不足。外から見たときに、ここにどんな企業があるのか知らないし、雰囲気も分からない。どうまくマッチングできるか。
・出て行ってしまう人もいるが、長く定住する人もいる。この地域が１番住みやすい場所だと選んでくれる人もいる。そういう人たちに仕事をつなげる。企業にいっぱい魅力があるのに、アピールできる機会が少ない。

【橋本市民協働環境部長】
・地元の企業を知ってもらうことや仕事へつなげていくことも大事な視点。その点も含めてこれから力を入れて進めていきたい。

【田中ゼロカーボンシティ担当参事】
・杉山委員から環境政策埋没気味というお話をいただいた。地域ぐるみ環境ＩＳＯ研究会の取組は日本にほぼ例がないが、国や研究者からは、環境政策の話になると、飯田だけではなく横展開が可能なモデル、周辺に拡散しやすいモデルを考えてほしいと言われる。みんなが真似できて更に優れた事業の取組を進めている。

＜基本目標３　“結いの心”に根ざす教育を実践し、豊かな心とリニア時代を生きる力を育む＞

【石神委員】
・不登校の理由は調べているか。小中学校で不登校が増えている要因はなにか。
・飯田市で特徴的に見られる要因はあるか。
・不登校の理由に授業がつまらないという話を聞いたことがある。塾などで授業の内容をすでに知っていることで、つまらないから学校に行っても仕方ないという子どもが増えてきている。
・例えば、音楽やスポーツの世界で小学生の頃から高い技術を持っている子は、音楽や体育の平均的な授業を行ってもつまらない。授業に出ていても先生の話

【秦野教育次長】
・マスクによって顔を隠してしまうことや学級閉鎖などにより、人間関係づくりが非常に難しくなったことなど、新型コロナウイルス感染症の影響が大きかった。しかし、それだけの理由で不登校が増加しているわけではないと考えている。
・飯田市における特徴的な要因はまだ見えてきていない。学校に登校しなかったとしても、子どもの居場所を確保していくため、支援センターとしての「びーいんぐ」を作り、民間と連携していくための中心になる、又は、ハブになる

を聞いていないという、登校しながら不登校ということも起きている。
・日本全体で非常に多様化が進んできている中、飯田市の先進的な教育のことを考えると、もっと社会の変化に対応する必要を感じる。
・学力調査についても、いろいろな分野で 100 点を超える個性を持った子どもはいる。本来は 200 点、300 点を取れる子の上限を 100 点として見て、他の子どもとの平均点で、飯田市の学力を評価することは難しい。バラエティー豊かな子どもの能力をどう指標化するのかが、これからの多様性社会において大切。
・どんな子どもも何かしらの能力が高い。その特徴をどのように育んでいくか。そこをどう対応していくかが重要になってくる。

【三浦委員】
・教育委員として小中学校の授業を見る機会がある。教員の方は分かりやすい授業を真剣に考えている。その１つとして、受け身の授業ではなく、授業の内容を理解している子どもが、分からない子どもに教える、やりとりをするという授業もある。能力が高い子が説明することで、分からない子が理解するだけでなく、能力が高い子自身も理解が深まり、自信を持つことにつながる。机で個々に授業を受けるという形から、相互に学び合えるような授業が実際にあると感じた。

【牧島委員】
・教育には平等性と卓越性というキーワードがあり、どちらも充実させていく必要がある。
・理解の早い子がゆっくりな子に教えるという学び合いの中で、それぞれに学びを確実なものにしていくことはとても大切なことだと思う。
・少子化が進んでいるにも関わらず、通信制の学校が日本全体で増えている。勉強は家でできるので、通信制の学校で高卒資格は取得して、自分のやりたいことのために時間を使うという、選んで通信制の学校に行く子どももいる。学校に行きにくさを感じる、受験に落ちてしまったという理由で通信制に行かざるを得なかったかつてとは、時代が変わってきている。
・飯田の子どもたちが、国語や算数を頑張っているなと感心している。中学校３年生の実力テストの問題を見ても、こんなに難しい問題を解いているのかと驚く。地方でこれだけの成績を収めていることは、子どもも教員の方も頑張っていると嬉しく思う。

【牧島委員】
・少子化が進んでいく中で、飯田市において学校が適正規模を保てないことは顕著に見られる状況なのか。専科の先生も足りていないという話を聞く。

施設を整備した。それぞれに不登校となる理由が異なるため、教育支援指導主事を配置し一人ひとりに支援を行っている。
・今年の学力テストの結果を分析し始めている。探究の学びができないと、学力テスト自体ができないということに変わってきている。課題としては、できる子とできない子が広がってきているなかで、まずはみんなできるところまで持っていくこと。
・一方で、能力が高い子どもたちについては、部活動の地域移行など、学校の中だけではカバーができない部分を地域でカバーしていくことになる。

【秦野教育次長】
・非常に子どもが少なくなってきている。国よりも県の方が教員の配置基準は緩やかではあるが、その基準でさえも満たせない。中学校でも複式学級とい

【三浦委員】
・食育について、多くの対応をいただいている。郷土食はそれぞれの地域ごとに様々なものがある。給食の地元産品使用率で評価していくことになると思うが、食の大切さから踏み込んだ食文化の伝承についても、子どもたちが興味を持てるような教材をつくるなどして取り組んでもらいたい。
・評価指標では、食育により子どもたちに食文化の大切さが定着していることが分かる指標を加えてもらいたい。

【石神委員】
・地元産の野菜を使うことができるのはとても素晴らしいが、東京では地元産の野菜がないので、食育というと自分で作ることをやっている。例えばうどんをうどん粉から作るなど。そのようにやっていくと広がっていく。食べ物を基にしていろいろな話へ広げていくことができる。チョコレート１つをとっても、原材料のカカオには歴史があって世界史へと広がっていく。これも１つの食育になる。目の前のものから広げていくと分かりやすい。ＫＰＩの対象が少し狭いのかもしれない。

【三浦委員】
・遠山地区は、地域に根差した食育をされているのではないか。

【前島委員】
・子どもが少ないため小回りが利く部分はある。パン屋さんで１件頑張ってくれているところがある。南信濃で野菜を作っている方のお手伝いをしたことがあるが、ご高齢ということもありとても大変だと思う。

【石神委員】
・遠山郷はジビエが有名。そういったものは給食では出ないのか。すごい食育に適しているように思う。

【前島委員】
・年間 500～600 頭ほど猟友会で捕獲している。猟友会から捌かれていく際にはそこまで高額ではないが、肉屋さんに卸されてからは高額になってしまうので、給食で出すことは難しい。

う状況が出てきている。学校のあり方、配置のあり方については早急に検討していく必要がある。専科の先生も全て配置できるかという問題もある。

【秦野教育次長】
・調理場では、味噌や梅干しなど地元のものを使って手作りして提供している。そういう話を子どもたちにしっかりと伝えていくことも大切だと考えている。行事食については、できる限りの中で、季節に合った地元の食材を使って提供するよう努力している。

【永井委員】 ・小学生の自発的な読書について、小学生になって字が読めるようになると、ほとんどの家庭で子どもに自分で読むように言ってしまう。小学校３年生４年生になっても、大人が読んであげないと本の楽しさは分からない。絵本は字を読んでいると絵が見られないということもある。家庭でどこまで関心を持ってもらえるかで、差ができてしまう。図書館でも読むリスなど分かりやすく楽しい資料を作ってくれているが、それが大人向けなのか子ども向けなのか分からない。両方あっても良いと思う。子どもが自分で本を選ぶことは当然あっていいことだと思うが、分かっている人が勧めてあげることも大切。家庭で読んで、保護者も感動できて、家庭で話ができるようなことに力を入れていく必要があるのではないか。 ・教科書に出ている本は、一部しか載っていなかったりするが、多治見市では、教科書に出てくる本コーナーがある。親が、子どもが教科書で読んでいるものにどういうものがあるか知る機会にもなり、子どもも教科書の続きを知ることができる。 ・今は中学生、高校生、大人でも絵本に癒しを求める傾向がある。なにか取っ掛かりがあると良い。	【秦野教育次長】 ・全国学力・学習状況調査の中に、生活質問紙において読書の調査がある。県平均よりも学校以外で読書をする割合は少ない。学校以外の場での読書をどのように働きかけていくかの課題がある。 ・市立図書館と学校図書館の司書の連携を行っていく。学校図書館の中での本の配置の仕方など工夫していきたい。
【永井委員】 ・飯田市ではふるさと学習に力を入れている。東京の子どもの中学受験の問題を見たところ、寄附という行為にはお金を渡すということと、災害があった時などにはその地域の食材を買ってあげるといった寄附の２種類があり、購買による寄附が優れている点を２つ以上あげなさいという問題があった。飯田の子どもたち、若者はふるさとのことは良く分かっていると思うが、世界的、全体的に世の中を見ているのか心配になった。 ・建築科の高校生が省エネ住宅の講演を聞いている様子を見たときに、質問の中で、グレタ・トゥンベリさんを知っている人と聞かれた際に誰も手を上げなかった。家庭でそういった話が出るのか、ニュースを見ているのか、新聞から知るのか分からないが、そういったことは市では言わないのか。 【前島委員】 ・持ち寄りということやっている。なんでも持ち寄ってやらないとお祭りはできない。お金で解決することは難しい。知恵を出し合ってやらないとできないということは、子どもたちに伝えている。	【秦野教育次長】 ・遠山地区の学校がユネスコスクールとして進めている。世界の中で、自分たちの地域がどうなのかを知ることが大切になってくる。そういったことをどのように教育に落とし込んでいくかは課題としてある。特に、遠山地区で霜月祭りがユネスコの無形文化遺産に指定される可能性があるなかで、自分たちの地域と世界をどのようにとらえるかという取組を特色としていきたいと考えている。
【牧島委員】 ・困った方がワンストップで解決先を教えてもらえる「びーいんぐ」が、ムトス	【秦野教育次長】 ・教員への支援としては、教育委員会にＩＣＴの教育や機器の使い方について

ぷらざにあることはとても良いことだと思う。さらに充実していくことに期待している。 ・ムトスぷらざに図書館の分館があることは、高校生の身近なところ、そして街の中心部に学校とは別の場所があることになる。とても良いきっかけになると思う。 ・ＩＣＴ教育が進んでいて、子どもひとりに１つのパソコンがある時代が来ている。教員の方にとって、どのような活用方法があるのか。若い先生はどんどん活用できるが、苦手としている先生への支援策としてどのようなことに取り組んでいるか。	の相談窓口を設けて、担当教員３名を配置している。各学校へもＩＣＴの中核教員を配置して中心になっていただいている。ＷＥＢサイト上でも、相談ができる窓口を開設している。使い方はかなり進んできており、個別最適化の学びには、ＩＣＴは非常に有効なツールとなっている。
＜基本目標４　豊かな「学びの土壌」を活かした「学習と交流」を進め、飯田の自治を担い、可能性を広げられる人材を育む＞ 【石神委員】 ・カンボジアにはこれまで、飯田市から行っていたのか、来てもらっていたのか。下久堅にＪＩＣＡの関係での取組もあり、重層的に取り組んでいることはすばらしい。	【秦野教育次長】 ・飯田市から行っている。市民団体でカンボジアの支援をしている団体があり、現地に飯田学校と呼ばれる施設がある。一般的に旅行会社がツアーとして組んでいるものではなく、市民の皆さんが交流されている地域へ行って高校生が学ぶようになっており、長い間続いている。
【永井委員】 ・東北スタディツアーの希望者はどのくらいの規模であるのか。行く前に準備はしていくのか。 ・単年で終わってしまうのはもったいないと思うが、今年も行うのか。	【秦野教育次長】 ・まずはどのようなことを学びたいかを勉強し、ＺＯＯＭでやりとりをしながら、東北へ行き地域で活躍している方に学んだ上で、帰ってきてから学んだことの振り返りをし、公開での発表会を行った。 【三ツ井主事】 ・昨年度は５人の高校生が参加をした。高校１、２年生が参加してくださったが、東北大震災からの復興としての地域づくりと飯田の地域自治をそれぞれ比較し、この地域を改めて考え、これからの地域のあり方について学びを深めた。リニアが通る飯田の地域で、自分たちに何ができるのか、飯田をどのようにしていったらいいのかという未来に向かって語り合うことを実践として行った。高校生自身は、今すぐになにか行動することはできないが、飯田のこと　を知る。地域の方の想いを知ることが必要だという話をしてもらった。 【秦野教育次長】 ・単に旅行会社にお願いしたわけではなく、飯田市公民館大会に東北大学の先生をお呼びしたときに、大会自体はコロナ禍で中止となってしまったが、公民館主事が学びを深める中でその先生と結びついている東北の皆さんのとこ

【三浦委員】
・丘の上結いスクエアを整備し、このムトスぷらざで高校生の姿が見えていたり、本日の会議が開催されているなど、良い環境を整備されている。このことが日常の姿として、高校生だけでなく様々な人が寄り合える場所というのが理想としてあると思う。
・平和人権について、令和４年の平和人権ゼミナールには飯田短期大学の学生も若者枠で参加させていただき、満蒙開拓平和記念館で松川高校の生徒さんに説明していただき、一緒にワークさせてもらった。若い人たちが若い観点で話し合う姿はとても生き生きとしていてよかった。戦争をテーマとして平和について考える機会になったという感想を聞くと、同世代での意見交換の大切さを感じる。飯田市の平和歴史記念館もムトスぷらざに併設されており、誰でも立ち寄れる場所で、戦争について考えさせられる一方で平和についても考えさせられたという感想を聞いている。ロシアの状況も日々テレビで見ている若者が、地元で歴史を知ることができるという状況が貴重なものになると感じた。
・学輪いいだについて、飯田短期大学やコアカレッジでなにか関わっていることはあるか。そういったところに積極的に参加していかなければいけないと思う。

【石神委員】
・学輪いいだを今年は１月に開催した。いくつかのセッションに分かれていて、バラエティーが増えてすばらしいと感じている。イベントとして開催しているが、これが常態化したらすごいことだと思う。講師を地域の方がやられるということはすばらしい。美博や歴研の方のほかに、地域で研究をされている方がたくさんいる。講義することはとても勉強になる。地域全体が本当に１つの大学となっている。常態化していければいいと思う。

ろへ行くことになった。自分たちで確認をしながら、高校生に何を学んでもらいたいかを組立てた。高校生たちは帰ってきてからリニア推進部に要請をして、リニアのワークショップを自分たちで開催した。
・今年度については、今募集をしているところ。
・カンボジアについては既に実施した。このカンボジアのツアーに初期の頃参加いただいた方が、ムトスぷらざへ飯田市公民館を移転する際に、カンボジアに行って考え方が変わりこの地域を支える人間になりたくなったという投稿を信濃毎日新聞にしていただいた。また、大学で東京に進学した参加者の方も、東京でカンボジア支援のネットワークを立ち上げて取り組んでいるという成果も出ている。

【秦野教育次長】
・学輪いいだの関係でワークショップを実施しており、そこに学生さんに参加いただくことがいいのではないか。
・令和４年はオンラインで実施している。

【遠山委員】
・学輪いいだの関係で、学生が地域学習に訪れているところを見ている。地域照会をさせていただいたこともある。非常に良い取組だと感じている。大学生が来てくれるということ、高校生と一緒に学ぶという場があること。大学が少ない地域で年上の方と高校生が話をしたり、議論したりする機会を作るという意味で、仕組みとしていいと思う。松本大学で学輪いいだをきっかけに、飯田や遠山郷に関わってくれていた方が、４月から飯田の企業に就職をされた。学輪をきっかけに就職先を飯田に選んで、夏は遠山郷にあるゲストハウスでアルバイトをされたりなどしていて、そういったつながりからＵＩターンにつながってきている。学びの場というだけでなく、地域を知るきっかけにもなってＵＩターンにつながっている。
・遠山郷の霜月祭りは、飯田市にとても支援いただいている。記録や保存は口伝えで引き継いでいる部分が多くある。舞い方やお囃子の仕方が特定の人だけしか知らない状況であり、ボイスレコーダーで記録して走り回っている現状がある。伝統行事は行政が関わっていくことが難しいところだと思うが、記録や保存については行政が支援できるのではないか。伝統文化が非常に豊かな地区であるため、引き続き支援をお願いしたい。

【前島委員】
・高遠の詩が地元には残っていなくて、上村に残っているものがある。なにかで地元に残していくことはとても大切。
・お囃子は、若い人と年配者で拍子を待ち方が異なる。なかなか分かってもらえない難しさがある。
・霜月祭りも実施しない神社が増えてきている。土日開催とすると、12 月の４週しかないなか、人の取り合いになってしまう。

【永井委員】
・今教わっている子が、どんどんつながって、舞い続けてくれて、継承してくれるようになっていくのか。

【前島委員】
・自分よりも 15 歳若いときから学校で習うようになった。今は 50 代の人が帰ってきて舞っている。今のところはつながってきているが、子どもも数が減ってきているので、どうなるかは分からない。

【遠山委員】
・授業の一環として、霜月祭りの舞を教えている。霜月祭りもタイプがそれぞれ

【秦野教育次長】
・伝統芸能については、広域連合や地域振興局が中心になって推進協議会を構成して支援を行っている。霜月祭りについては、それよりも前に、美術博物館でまとめている。同じような形で広域連合がまとめたのが、新野の雪まつりと清内路の花火である。そのときには、ビデオで全て記録して美術博物館に保管されている。美術博物館に相談していただいて、販売されているＤＶＤは編集されたものになっているが、元データは全て始まりから終わりまでのかなりの分量ある。ほかの分野まで広げていくことには課題がある。
・高校生の意識調査では、地域課題の解決に関わりたいという想いは強い。小中学校で地域の学びを大切にしてきていることの現れではないかと分析している。ＯＩＤＥ長姫高校の先生方の話を聞くと、またふるさと学習かと地域人教育を始めるときに聞こえるというが、地域人教育で地域の人たちから学んでいるうちに、最後の発表会では地域の人と肩を抱き合って泣いている姿が見られる。地域に関わることが小中学校で積極的に行われるようになったことが、大きいのではないかと思う。

に違っている。順番に各地区の祭りを学ぶことをやっている。今の子どもたちも熱心にやっている印象がある。大学生が帰ってきて祭りに参加している姿を見るとつながっていると思うが、もともとの母数が減ってきているため難しいところもある。上村と南信濃が統合して遠山中学校になったのが 10 数年前になる。南信濃は教育としては霜月祭りを扱っていなかった。上村ではずっと昔から教育の一環として霜月祭りをやっている。上村の子どもの方が祭りのときに帰ってきている印象があり、幼少期に祭りに関わっていることが大切だという印象を持っている。 【牧島委員】 ・社会教育は広範囲にわたって多岐な活動を継続されている。すごく大切なことで、ムトスや学輪いいだを継続できているすばらしい地域だと思う。高校生の意識調査について、地域のためにがんばりたいという高校生がこれだけいることは自慢していいことだと思う。それは、ふるさとの良さや課題意識が高めている教育の成果の一つだと思う。高校生くらいになると利他的であるとか利己的であるということではなく、自分のできることを判断している。ふるさとで頑張りたいと思える子どもが増えていることは、幼小中学校のふるさと教育やキャリア教育の効果が出ているのだと思う。これを継続していけばもっとおもしろくなるかもしれない。 ・学輪いいだについては、飯田コアカレッジの学生も探求的な学びに取り組んでいるので、なにか交流できたらありがたい。できたらお声がけいただきたい。 ・地元の公民館の部員をやっている。昔からの継続性がある地域と比較的新しくできた地域とでは次世代とのつながりも異なる。次の担い手を探していくことはとても難しい。今後、担い手つくりにどういう施策ができるかが大事だと思う。 **＜基本目標５　文化・スポーツを通じて人と地域の輝き・うるおいをつくる＞** 【石神委員】 ・新たな芸術文化活動の拠点のイメージはどのようなものか。 【三浦委員】 ・人形劇のまちとしての取組で、コロナ禍で中止になったことで、小学生が中学生の人形劇を見る機会ができたことは、小学生が中学生のお兄さんお姉さんに憧れる機会として大事だと思う。次世代へつなげていくことにもつながる貴	【秦野教育次長】 ・新文化会館のことである。市民のワーキングで作り上げていくことを大事にしており、市側からイメージをお伝えすることはしていない。今年度の３月に新たな文化会館がどうあるべきかを出していただく予定である。

重な機会だと思う。 ・異文化交流が小さいときからできるシャルルヴィルメジエール市の子どもたちとの交流会は、重要で続けていくことが大切だと思う。 ・地元の子どもでも菱田春草を知らなかったりする。お墓を回ったりするとほんとにこの地域にいたことが実感する。そういった中で絵を見ると、また見方も変わってくる。課題認識で芸術文化に親しむことができる展示機会を工夫することや、展示されることに工夫をしていくことはとても大事だと思う。菱田春草の足跡をたどるガイドについても、行ってみたいというきっかけがまだまだ必要。主体的な行動を促していく工夫も必要なのではないか。 ・適切な部活動という心身が豊かに育つことに対して、筑波大学の指導のもとで、科学的根拠をもって取り組まれることは大切なことだと思う。 ・文化芸術活動の中で、霜月祭りのようなものを取り組んで、興味をもった子どもが遠山郷に入っていくことができるような文化活動のきっかけになると良いと思う。 【遠山委員】 ・生徒数の減少により団体スポーツができないことなど、スポーツに制限がかかってしまっていることは理解できる。小さい学校ほど選択肢が限られていることもある。中学生期の多様なスポーツ環境の充実は広げていってもらいたいと思う。 ・中山間地域は本当に人数が少なく存続が厳しいことが目に見えている。学校の統廃合の話は、既にしていかないと間に合わない段に来ている。どうやって中山間地域で子どもを育てていけるのかは、行政としても力を入れていただきたい。 【牧島委員】 ・人形劇フェスタが復活してよかったと思うが、フェスタに地域外からどのくらい人が来ていたのか。コロナ禍前と比べて増減はどうだったのかはわかるものなのか。 ・アジアだけでなく、世界的に有名な劇団も来ていたが今後はどうなるのか。 ・カンヌ映画祭など、大きなイベントには集客力がある。まちの誇りにもなっている。若者は飯田にはなにもないと言う。街にはなにかこれはという柱が必要。飯田って人形劇フェスタの街だよねと言ってもらえるところを目指して発展させていってもらいたい。 ・若者を対象としたスキマスイッチのコンサートの実施はとても良いことだと思う。民間との協力・連携を進めていけると、新しい切り口もでき、若者が求めているものに応えられるのではないかと感じた。	【秦野教育次長】 ・観覧者では、アンケートを取っているため分かるかもしれない。劇団については戻ってきている。 ・今回はアジアだけに限定したが、今後はもとに戻していく。

【永井議員】
・スポーツに関しても、地域の子どもたちに対しては取り組んでいるが、やはり一流のものが見たいと思う。飯田ではなかなかそういった機会がなく、せいぜい自転車くらい。
・人形劇についても、ほかの地域にはない。その割には市民が冷ややかな印象がある。子どもが小さいときに行ったという人が多い。市民を巻き込んでいく工夫が必要。地域でやっているところがあることも飯田の特徴。素晴らしいことだと思うので、他人事にさせない工夫があると良い。

【牧島委員】
・学生参加のきっかけとしてはいいアイデアだと思う。その後続けてもらえればなお良い。
・中学生の部活動地域移行について、教員の働き方改革への対応という話が先行してしまって、そのためにやっているのではないかという誤解もある。今までの部活が子どもにとっていいものだったのかという、根本から考える段階に来ているのだと思う。もう少し広報が必要なのではないか。先生たちが気の毒に思う。

【前島委員】
・人形劇を地域でやる際には、手伝ってもらうと近くの川で魚のつかみどりができてそれを食べることができるようにしている。けっこう市街からも人が来てくれる。

【石神委員】
・飯田市は超一流のものがけっこうある。菱田春草や人形劇、人形劇場、遠山郷など。新文化会館も一流ではなく超一流をコンセプトにすることはあり得るのではないか。地方に有名なホールはけっこうある。超一流の施設があることにより、超一流の音楽家が集まり、大きくまちを変えていくこともある。

【秦野教育次長】
・今年の人形劇フェスタはサポートスタッフが足りなかった。以前はすごく多くのボランティアスタッフに支えられていた。人形劇自体を地域全体に浸透させていく大きな役割を、ボランティアスタッフが担っていた。日本だと人形劇は子どものものという印象があるのかもしれないが、海外では大人も楽しむものである。フェスタは十分大人だけでも楽しめるものをやっている。まずはボランティアで来てもらう方が効果的だった。
・大学入試が変わってきている。年内のうちに学校を決めていくように変わってくると、総合入試の試験内容にボランティア証明書をつけるようになっている。そういったところから入ってもらうやり方もあるかもしれない。そのくらいにボランティアスタッフの応募が減ってきていることは大きな課題である。

【秦野教育次長】
・新文化会館は、市民の皆さんの議論の中から作り上げていくというコンセプトがある。今いただいた意見も出ている。演奏家に来てもらう、俳優、劇団に来てもらうのではなく、ここで活動しているものに魅力を感じてもらい選択してもらう施設にできないかという意見も出ている。地方の施設であるため、都市部の劇場に勝てない、リニアで都会に行った方が近い、という中で、市民の活動が魅力的であるため、演奏家が一緒に活動したくなるようなコンセプトはどうか。そんな議論がされている。まだまだこれからの議論。

＜基本目標６　結婚・出産・子育ての希望をかなえる＞ 【菱田委員】 ・私自身が子育て世代であり、子育てを支える保育士・幼稚園教諭を育て、地域へ輩出する仕事をしているため、地域の子育ての状況を見ることができる立場にあるが、子育ての前に、こどもが生まれない状況がある。 ・結婚をするとこどもが生まれる確率は昔から変わっていないと一般的にいわれる。不妊・不育症への対応等はあるものの、結婚すればこどもを生む流れになっていきやすいと考えられる。そもそも、結婚しないところに課題がある。つまり、少母化が課題であると感じている。 ・市では、婚活イベントやマッチングなどの婚活支援について、本人やその親を含めて取り組んでいると思うが、コロナ禍の影響で、出会いの場が少なくなっている現状もあり難しさがある。どのように人が人に出会うのかについて真剣に向き合っていくことが必要ではないかと考えている。 ・日本人がこどもを産むことが難しい時代だが、この地域は、外国人集住都市として、昔からの外国人の方、特に南米系の方が多く、また、長く定住している方が多いという特徴があるまちである。もしかすると、外国にルーツのある方々の子育てとして何か良い面があるのかもしれないと思いブラジル人にインタビューしたことがあるが、リーマンショックでも解雇されず、20 年以上同じ会社で働けているとの話があった。外国にルーツを持つ方々にとってこの地域は、基盤がしっかりしており、定着しやすい環境にあるのかもしれないと考えている。 ・多様性の議論があるが、日本人に関わらず、多様な人々が当地域に来て、定着し、育っていく中で人口が増え、そのことが新たな人や企業を引き付けて地域が活性化していくという考え方も検討していく必要があると考えている。 【中田委員】 ・飯田市の人口に対する外国人の割合はどの程度か。 ・私は東京に住んでいるが、茨城県常総市に田んぼを借りて通っている。 ・茨城県常総市は、人口の１割が外国人で、車に乗っているのは日本人だが、自転車や徒歩の人は、ほぼ外国人という感じのまちである。自動車の輸出の関係の仕事が主であると思うが、農家で働いている方もいる状況で、すごい勢いで外国人が転入し、新しいコミュニティや、モスクやお寺ができている。伴って、学校現場もそうした対応が求められている状況だが、面白い地域として注目されている。飯田市が、外国人の定着率が高い地域であることを知らなかった。 ・茨城県常総市は、リーマンショックの時には、ブラジル人が一斉にいなくなった。アパートまるごと人がいなくなるような状況を知っているので、そう考えると、飯田市には、何かがあるのかと思っている。	【林健康福祉部長】 ・市内に、おおよそ 2,000 人くらい、人口割合で２％程度だと思います。 ・一時期多かった時期もありましたが、減少傾向であると思います。

・結婚するということ、20 代女性の人口流出の２つは重要な課題であると感じている。福祉の前に、産業の話があると考えている。 ・確かに結婚すればこどもを産むというのは、私の会社での実感としてもある。 ・結婚するきっかけは、社内恋愛もあるが、マッチングアプリでの出会いが多い現実がある。不思議なもので、東京の人と広島の人が結婚したら女性の方に引っ張られてきた。結局、そこに仕事があるかないかということに関わっていると感じた。では、飯田市が 20 代の女性にとって暮らしやすいのか。暮らしにくいわけではないが、暮らしやすいかと言われると必ずしもそうではないと感じている。 ・若い女性にとって面白いところがないということではなく、女性に対するいろいろな意識が感じられる状況下では、都市に出て人間関係のしがらみのないところにいた方が暮らしやすいし、子育てもしやすいかもしれないと思っている。 ・結婚した後も仕事を続けられるかどうかという点では、家事や育児の中でも「これは、当然、女性がやらなきゃ駄目でしょ」といったような空気は今もあり難しさが残っていると感じている。 ・実現可能性は別にして、市議会議員の半分を女性にする、福祉関係の労働者の給与を 1.5 倍にするなど、カンフル剤的な施策を実行すると、この自治体は女性の課題についてよく考えているなと思ってもらえるのかもしれないと思う。 ・女性が働きやすい状態は、男性も働きやすい状態であると考えられる。 【和田委員】 ・データがあるわけではないが、自分自身も含め私の周りには、比較的、妻が飯田の生まれで夫が他地域から来ているパターンの夫婦が多い。 ・未婚の女性が暮らしづらい点はあるかもしれないが、子育てについては祖父母が近くにいると助かることもあり、他の地域で出会い結婚してから帰ってくる方も、一定程度いると感じている。 ・こうした状況から、この地域で出会いがあり結婚するということもあると思うが、この地域で育ち一旦は外に出たけれども、「やっぱり子育ては自分の生まれ育った地域で」という考え方で、Ｕターンの女性を増やしていく方法を考えて行くことも一つの方策ではないかと考えている。 ・「結婚したい」と思っている方の出会いについての施策は必要であるとは思うが、一方で、結婚を望まない、結婚しない選択肢やこどもを持たない選択肢を尊重すべきという点も考慮する必要がある。結婚することや子育てをすることの魅力が感じられるような仕組みや取組を実施することも重要ではないかと考える。 ・労働者の立場で女性活躍を推進していく立場からは、女性活躍と少子化が反比	

例的になることがないように、男性も家事や子育てをしっかりとする、そういう働き方ができるようにすることが大切な視点であると考えている。 【山上委員】 ・結婚相談所の業務として、結婚相談やイベントを実施している。また、各地区で、結婚相談員に活躍いただいているが、その中でも、男性からの相談は多いが、なかなか両性の思いが通じることが少ない状況である。 ・結婚相談員の皆さんから聞く女性の皆さんの声としては、働いており、ある程度の収入があり、自分のやりたいことができている。結婚してそれに縛られることを嫌う傾向はある。もとより、地域に女性が少なくなっており、多くが、働ける場所（やりたい仕事がある場所）へ出て行ってしまっている現状があると感じている。 ・一昔前のように、「嫁さんは、家に居て…」という感覚は全くなく、性による差別や偏見から脱し、真に平等な社会に向かっており、結婚観が変化していると強く感じている。 ・結婚すると、妻の方に引っ張れて夫が動くという例は結構ある。女性にとって生活しやすい、暮らしやすい、子育てしやすい場所というところに、目が行くという点は、よく理解できる。 ・生活困窮者の相談・支援業務では、ひとり親世帯の相談が多くなってきている。離婚してひとり親になる方だけではなく、結婚をしないでひとり親になっている方も結構いる状況となってきている。つまり、子育てについても、そのあり方が多様化してきている。家族の形が多様化してきており、従来通りの結婚相談所のやり方で良いのかを考えながら業務に当たっている。 ・個人的な感覚も含めてだが、男性のコミュニケーション力が低く、人との付き合い方がうまくできないパターンが多くある。もちろん、コミュニケーションツールが革新的に変化しているので、一概に言えない部分はある。セミナーを開催してスキルアップを図るようにしているが、人と人の関係性にも大きな変化があるのかなと感じている。 【矢澤委員】 ・20 代の女性が少ないのは理解できる。 ・私自身の経験として、県外に進学し就職に際して飯田市にＵターンしたが、その当時の友人との会話は「飯田って出会いあるっけ？」だった。 ・バイアスもかかっていると思うが、出会いたいと思う男性がいない。 ・女性は（今は共学になっているが、当時は）飯田短期大学、駒ケ根短期大学があり飯田市に残る可能性はあるが、男性は、進学しようとするとほとんどの方が、飯田市を出て行く現状があり、男性がいない。	

・就職のタイミングで帰ってくる男性も少ないとなると本当にいない。
・同世代の中には、帰れるなら帰りたいという気持ちを持っている人は多いが、出会いという点では、20 代の男性が帰ってくることも重要な点であると感じる。
・結婚することのメリットを感じない。
・結婚に対する意欲がないのは、出会いの場がないということもあるとは思うが、結婚した際の女性に求められる男性から若しくは年上の女性からの無言の圧というものがあると感じている。

【氣賀沢委員】
・私はいわゆる団塊の世代で、中学校は、１クラス 50 人のクラスが 10 クラスあるような時代に育ってきた。そうした時代であったからか、結婚について、あまり考えることはなかった。ただ、女性でも男性でも、進学のために市外へ出ると、帰ってくる人は少ないという状況は、今と変わらない構造であった。
・当時の女性は、どうしても家を継がなければならないという方は、出て行っても帰ってきていたが、そうではない方は、今と同様に、ほとんど帰ってくる方はいなかった。
・私が 20～30 代前半の時期はいわゆる「右肩上がりの時代」で、今のようにコンサートやイベントが開催されるような場がなかったので、夏なら登山やキャンプ、冬ならスキーと自分たちで考えて楽しんでいたが、結婚云々という話は全くした記憶はない。
・まちづくり委員会の役員を担う中で、地域の現状を見ると、とにかく 20～30 代の女性も男性もほとんどいない。また、今年度の小学校入学者は 18 名という状況で、ＰＴＡ活動が課題になるような状況となっている。
・地域が縮小している現状を、みんなで考えようとはいうが、何を考えればよいのか、自治の難しさを痛感している。
・６月の市長と語るまちづくり懇談会で、子育て中の 30 代の男性から、休日に天気が悪いと行くところがなく、こどもと親が楽しめる場所を求めて伊那や名古屋に連れて行っているとの話があり、地域としてそういった視点での検討をしてみる必要があると強く感じた。

【髙山こども・子育て担当参事】
・氣賀沢委員から、子育て中の父親のご意見として伺ったが、今、実際に子育て中の方や少し前に子育てされた経験から、飯田市にこういくことがあれば、こういうものがあれば良かったのにというところがあれば、ご教示いただきたい。
・どうなれば、飯田で結婚して子育てしようと思えるのか。

【矢澤委員】
・こどもがどれだけ笑顔でいられる環境があるかどうか。
・出かける場所がないとの話があったが、恐らく大型商業施設をイメージしてのことと思うが、私自身は、地域の方が地域の史跡を説明しながら案内してくれたり、地域の皆さんが見守ってくれていることをこども自身が感じ、そのことを親である私に話をしてくれることはうれしいと感じる。
・商業施設はないが、豊かな自然があったり、やま保育であったり、飯田ならではの環境でいきいきとできる場所がいっぱいあればいいと感じる。
・こうした子育て環境は、都市部にはなく、子どもたちがいきいきとしている姿を見ると、都市部へ出て行った人たちが、「子育ては、自分が育った飯田がいいな」と思ってもらえると考える。
・飯田の持ち味を生かして豊かな育ちを支えるというところが、すごく良かったし、本当にありがたかった。
・保育士の皆さんは、本当に大変だと思うが、地域と連携した取組を継続的に実施してもらえると良いと感じた。

【髙山こども・子育て担当参事】
・それでも、雨の日に行く場所がないというところはどうでしょうか。

【矢澤委員】
・そこは、リアルにある。
・新型コロナウイルス感染症で、外に出ることができないとなったときの不安があったのは事実。雨が降ってなければいくらでも行くところはあるのにと思ったことはある。
・親の状況もあると思う。働いていると、どうしてもこどもとの関りが難しい面もある。
・普段から絵本を一緒に読む、折り紙を一緒にするなどの時間が作れていれば、テレビ、YouTube やゲームに頼らない子育てができていたら、雨の日だろうと関係ない子育てができるのかもしれないとは思う。親世代の課題であるかもしれないとも思う。

【髙山こども・子育て担当参事】
・子育て中の親が交流する場として集いの広場を作ってきているが、どっちかっというとちっちゃいこども向けのイメージであり、小学校１年生ぐらいのこどもは、親あるいはお友達と遊ぶ屋根のある場というと確かにないかもしれないという思いはある。

【菱田委員】
・家以外で、その年齢層が過ごす場所としては、学童保育の場か障害のあるこどもの場合は、放課後等デイサービスになりますが、キャパが限られていること、

こどもが多く関わる人が少ないので、うまく回らないという課題があるように感じている。
・予算の関係はあると思うが、やはり人が足りてないという印象を抱く。また、発達障害と言われるようなこどもが全体の 10%程度いると言われている中で、少人数で対応しきれないとなると、親も安心して預けることができないという状況があるとは思う。
・集いの広場は充実しているとは思うが、家・学校以外のところでの過ごし方をどのように位置づけ、拡充を図っていくかに課題があると考えている。

＜基本目標７　「市民総健康」と「生涯現役」をめざす＞

【和田委員】
・介護人材の確保の面で、非常に苦労がある点は理解できるし、この課題は飯田市だけの問題ではなく、私たちが生活を送る上で、なくてはならないエッセンシャルワーカーの処遇改善が重要ではないか。介護に携わることを誇りに思えるような、待遇・処遇に転換していくことから始めるのではないかと考えている。
・大変な仕事であることは理解しているし、飯田市でできることとできないことがあることは理解するが、やりがいをもって働くことができる環境整備から始めていく必要があると感じている。
・民間企業も含めて、今後、定年が延長されることを考えると、働きながら介護をすることが多くなり、伴って、施設での介護の利用は多くなってくると推察する。労働者の視点からも、介護人材の確保は重要な課題であると感じている。

【菱田委員】
・飯田短期大学では、介護に関する人材を十分に地域に輩出できていない面もあるが、男女共学化により、男性の介護人材を輩出する準備は整いつつある。
・新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、エッセンシャルワーカーの大切さは理解が広がったが、それが処遇改善にまではつながっていない現状があると感じている。
・エッセンシャルワーカーの重要性とは裏腹に、処遇が改善されない状況が続いている。製造業等と違って、生産性が高い職種ではなく、地域の経済の状況が良くないと全体としての量や質を維持することが難しく、維持することも難しい面があると感じている。

【中田委員】
・女性だけであれば処遇が悪くて良いという話ではないが、男性の職員が増えて

くると、より処遇の改善が求められると思う。
・違う角度からの視点であるが、先日、香川県にモスクを作った方の話をお聞きする機会があった。その方の話によると、日本でケアワークに従事するイスラム系インドネシアの方が増えているが、イスラム教では、人に施すことが自らの行いとして重要で、ケア労働に向いている面があるとのことであった。
・宗教等を含めて、文化的な土壌の違いはあるとは思うが、外国人人材を如何に取り入れていくかという視点でも考えてみることは大事なことではないかと感じた。

【山上委員】
・外国人人材に関しては、改めて国も後押しする動きがあるのは事実で、飯田市社会福祉協議会でも、指定管理を受託している施設が３施設あり、介護人材の不足は喫緊の課題であり、外国人人材の導入についても考えたことがあった。
・導入に際しては、いくつかの課題があることが見えてきており、在留期間がだいたい５年で人がリセットされてしまい、質の高いサービスの継続性の観点に加え、その人材を育成するための職員が必要となる点に課題がある。また、言語への対応を含めて、住生活環境への配慮が必要でなかなか手が出なかった。
・介護人材不足は、全国的な課題ではあるが、飯田市は非常に深刻な状況になりつつある。飯田市社会福祉協議会でも介護職員の募集をするが、流動性が高い方の募集はあるが、数は少ない状況で、乗り越えるべき高いハードルは、たくさんあるが、改めて、外国人人材については検討する必要があると感じている。

【菱田委員】
・外国人人材に関しては、在留期間があり、なかなか根付かないという現実はある。特に、ひとりで日本に来て資格を取っても、そこに根付くことなく、給料の良いところへ流れてしまう傾向にある。法の改正も必要になるので、地方自治体でできることではないが、外国人介護人材が、家族と共に移住し、定職に就き、定住して子育てをしてというような流れができれば、人口増の視点からも効果があるとは思うし、そうした視点でも、考えて行く必要があると思う。
・外からの一手で全体を変えていくことも、長期的な視点の中で、視野に入れても行く必要があると考える。
・労働のあり方としては、保育の現場と共通する部分があるが、処遇の改善を如何にしていくのかという点では、労働時間は削減するが給料は減らさない、労働日数を減らすが待遇は大幅に変えないなど、働く時間の調整を容易にできるようにして、いろいろな働き方を容認することで、エッセンシャルワーカーの仕事の魅力が向上し、担い手が増えてくるのではないかと考える。介護の仕事も保育の仕事も、どこにでもある仕事であることを考えれば、仕事の魅力にひ

かれて、人材が来てくれるということもあるかもしれないと考えている。
・本来、エッセンシャルな仕事は、どの地域にも必要な職であり、住みたいところに住んで、ある程度の所得が保証される魅力ある仕事であると思う。

【中田委員】
・介護の現場は、職員としてシフトに入ると忙しくて、他のことができないほど忙しい職場なのか。
・助産師の資格を持った方が、農業をやりたいということで地方に移住したら、重宝がられ、半農半助産師的な生活を送っているという話を聞いたことがあるが、確かに、そうした暮らし方ができるのであればいいなとは思う。給料体系や働き方に自由度があるといいなとは思う。全国どこでも、必要とされる仕事であるはずだと思う。

【山上委員】
・介護保険制度の導入により、介護福祉と介護サービスの違いが出てきている。いろいろな事業者の参入により、介護サービスは競争にさらされ、結果として利益追求の視点から、賃金が上がらないというところがあるとは思う。また、国も報酬を上げることに関しては消極的な面もある。
・また、介護職場でも看護師は必要だが、もちろん看護職場でも看護師が必要で、最近では、介護職場に看護師をリクルートに来る看護職場があり、介護と看護の間で看護師を取り合っているような状況もある。
・介護保険制度の性格上、介護報酬が上がらないと賃金を上げることはできないが、それにより、保険料が上がることにもなる点も加味する必要があると考える。
・人生 100 年時代と言われるが、重要なのは 100 歳でピンピンコロリは難しいというところである。つまり、介護人材の不足や施設の必要性の議論の前に、可能な限り、介護サービスを使用する期間を短くする観点からの、介護予防は重要な取組であると考えている。
・この点からは、皆が皆「介護予防大事だ」という状況にまでは到達していないが、地域の方々の介護予防に関する関心が高くなっていると感じている。先ほど、Ｂ事業の話があったが、地域の皆さんが介護予防事業に積極的に関与してくれるようになってきている。ただし、ここにも担い手の課題がある。

【氣賀沢委員】
・まちづくり委員会の取組として敬老会があったが、先日、「70 歳の壁、80 歳の壁」という本を読んだ。その中には、「福祉で財政が厳しくなったのではなく、公共事業で財政が厳しくなったんだ」という話があった。高齢者が元気になる

かどうかは、高齢者の心を動かすことやサービスを充実させることで、それが壁を乗り越えることになると書かれていた。
・また、先日の勉強会で本田由紀先生が仰っていたこともそうだが、私たちは、税金の使い方や取り組むこと、エッセンシャルワーカーの現状や給料のことも目を配って行かないといけないと感じている。
・先日、地域で防災に関する出前講座をやっていただいた。福祉に関する分野でも、まちづくり委員会等で、学ぶ機会を増やしていくことが大事だと感じた。例えば、銀座にある地域包括支援センターを知っている人がどれくらいいるのか、社会資源が目の前になるのに、きちんと理解して活用していくことができていない現状がある。困ったときにどうするか。地域の皆で学ぶことをきちんとする必要があると感じている。

【矢澤委員】
・若年層の健康対面では、メンタルヘルスは良く言われるが、身体的な健康についても意識を高くしなければいけないと感じた。自分自身も含めて若い人たちは、行政がここまでやっていることを知らないので、それを利用する意識も低いのではないかと感じる。知る機会や情報の発信が多くあると良いと思う。
・介護に関しては、私は、祖父母と一緒に暮らしており、近所のおじいちゃん、おばあちゃんも面倒を見てくれるというありがたい環境で育った。私の子どもは、私と同じような環境にいるのでわからないが、今の子どもたちが、高齢者の皆さんと触れ合える環境にいるのかどうか。私自身は、今になってみると、おじいちゃんやおばあちゃんから、地域での暮らし方や守っていくべきことな

【髙山こども・子育て担当参事】
・お話を伺う中で、整理しておくべきことがあるので、説明させていただく。
・保育職の給料、看護織の給料、介護織の給料は、すべて出所が違う、集めてくる仕掛けが違う点。
・保育職の給料は皆さんからいただく税金と皆さんから集める保育料が源泉となっている。医療職は、私たちもそうですが皆さんが支払っている医療保険、社会保険や国民健康保険がそれにあたり、そこから支払われている。介護職は、保育・医療職とも違い、市町村が運営する介護保険から支払われている。従って、介護職の処遇を改善するということは、すなわち、そこの市町村の介護保険料が上がるということを意味する。
・保育、医療の母体は全国であるが、介護だけは市町村が保険者になっているので、小さな母体が介護サービスを提供する構造となっていることのバランスの難しさがあることはご理解をいただきたい。
・もう一つは、人口が減るということは、担い手不足もありますが、支える人が減るということも意味しているので、その部分でのバランスも加味する必要があるという点もご理解をいただきたい。

どの大事なことを教えていただいたなと感じることがある。
・介護施設に入所すると、住み慣れた地域から離れて、面的につながっていた生活が点の生活になってしまうが、そうなる前に、小学校区くらいの単位で、世代関係なく関係性が持てるような、触れ合えるような機会があれば良いと思う。こうした関係性があれば、「介護保険料上げます」と言われた時に「なんで？」とならず、介護サービスの大切さを含めて、腑に落ちるのかなと感じる。

＜基本目標８　共に支え合い、自ら行動する地域福祉を充実させる＞

【氣賀沢委員】
・地域の状況からは、8050 問題が気になっている。実際、小さな単位の地区で見て、3 件くらいの世帯がそうした状況にあり、大括りに地区全体で見ると 60 件程度はあるのではないかと推察している。課題として表面化していないけれども、潜在的には大きな課題であると感じている。特に、ゴミ出しができないといった課題は、現実的に課題になっている町内もある。
・地区では、地域福祉委員が頑張ってくれているが、実際には、役員の選任に非常に苦労している。数年前に、人数を削減したが、人口が減少し、高齢化が進んでいる地域では、負担感がある地域福祉委員のなり手がいないことが悩みとなっている。日中の会議や昼間の見回り活動がありやむを得ない面があるが、どうしても担い手が 65 歳以上の住民になってしまい、数年で非常に厳しい状況にならざるを得ない現状がある。
・支え合いマップは、橋北地区においては結構整備されており、空き家の情報を載せるなどの工夫をしている。現在、明治大学の学生とともに空き家対策について話合いをしているが、今後、この空き家情報を活用する取組も検討していきたい。
・地域には福祉的な活動をしている方々がいるので、こうした方々のお話をお聞きしながら考えて行くことも必要ではないかとも感じている。

【和田委員】
・事前に資料を読む中で、ひきこもりへの支援や障がいのある方への就労支援は具体的にイメージすることができる。安心して暮らせる地域共生社会を目指しましょうという時の「地域共生社会」について、子どもからお年寄りまで皆が仲良く、助け合っているふんわりとしたイメージをすることができるが、自分

【髙山こども・子育て担当参事】
・氣賀沢委員、矢澤委員のお話を伺って、学びは大切だなと改めて考えた。
・公民館での学びの場はあるが、利用されている世代構成があるのかなと感じる。色々な世代の多くの方と地域を学び合う、原点に戻る必要があると感じた。

自身が持っている最終的な目指す社会の在り方が合っているのか、そうなるために何をしたらよいのか、どこに向かって何をしていけばよいのかが分からない。そうなればいいなと思っても具体的な関わり方が分からず、私個人は何をすればいいのかと考えてもどかしく感じる。 ・実際の地域生活では、公民館の役が回ってくれば受ける、青年団や壮年団の活動に積極的に関わることはできるが、そうしたことが、地域共生社会の実現に寄与しているのかと考えてしまう。	【林健康福祉部長】 ・地域福祉は難しい。どうすればいいのか模索し続けているのが現状である。 ・地域への関わり方を、それぞれが、それぞれの立場で関わり、それを積み重ねていくことではないかと考えている。 ・お互いが顔の見える関係であれば異変に気付くことができるというような関係性を地域で作り上げていくことから始まるのではないかと考えている。 【髙山こども・子育て担当参事】 ・それぞれの地区、それぞれの生活の場において、困っていることが違う。課題が違うのでこれが理想ですということが書かれていないと考えている。 ・例えば、中山間地で病院までの移動手段がない住民が多い地域では、有償移送サービスの仕組みを構築し助け合う、病院施設が近くにあり、タクシー会社もすぐ近くになるので移動に課題はないが、高齢の単身世帯が多くゴミ出しに課題がある地域では、近所の動ける方が、家の前まで出してくれれば、集積所までは持っていくというような仕組みを構築して助け合うといったように、各地区で課題の重さが違い、具体的な課題解決策も違うが、共に助け合って生活をしていこうとする大きな方向性を提示しているのが地域福祉のあり方だと理解している。 ・根本的には、今は「支え合い」と言えているが、人口減少が進み高齢化が進むと、今後も「支え合い」と本当に言えるのかを真剣に考える、未来を語り合う大事な時期に来ていると感じている。 ・これまでは、地域というとまちづくり委員会等や自治会などの地域に住んでいる人で支えあうというイメージが強いかもしれないが、地域にある事業所や法人の皆さんにも、その一員になっていただくことも進めている。 【林健康福祉部長】 ・地域によって、置かれている状況が違うために福祉課題も違うので、取り組んでいる内容も違っている。 ・ふれあいサロンについて、飯田市社会福祉協議会の山上委員から、現場の状況も含めてお話いただければと思う。

【山上委員】
・ふれあいサロンの利用者は高齢者が中心で、日常的に交流や活動がなく、家に籠って機能が低下してしまうことがないように、「ちょっと出ておいでよ」という場で、地域の住民主体で開設していただき、お茶を飲んだり、お話をしたり、軽い運動をしたり、物を作る活動をするサロンである。また、地区の保健師や地域包括支援センターの職員がお邪魔して、色々な情報を提供したりしている。目的とすると、孤独にならないようにすること孤立の防止である。また、ふれあいサロンは、地域の皆さんが運営していることで、孤立の防止だけでなく、見守り機能もある。

【林健康福祉部長】
・ふれあいサロンを含め、地域福祉活動は、社会福祉協議会の地域福祉コーディネーターがマネジメントしており、こうした活動を行っていく上で、地域福祉コーディネーターは非常に重要な役割を果たしている。

【中田委員】
・わからないことがわからない状態であったが、今の話を聞いて理解することができた。
・健康で普通に暮らしていると、関心がないわけではないけれども、全く関わらない、存在すら知らない世界になってしまっている。特に、障がい者福祉の分野は、身近に又は近所に、障がいのある方がいないとわからない。気持ちがないわけではないけれども、どのように関わったら良いのかわからないというのが現状である。
・現役で働いている人たちは、おおよそ、そうなのではないかと思う。その点では、もっと若いうちから、関わりたい、関わるべきことのように感じている。
・本当に自分事になって、市役所の窓口に行ったり、調べたりして、初めて知ること、わかる分かることが多いことを実感している。
・現在、東京に住んでいるが、年代的に親の介護のために帰郷する機会が増えてくると思うが、周囲の人に話を聞いてみると、この夏にエアコンを設置するために帰郷した、親が病気になって帰郷したという方が結構いることが分かった。この人たちは、もちろん親の介護のために帰郷しているが、地域を何とかしたいという思いを持つ方もいるとすると、この人材を何とか生かすということも大事だと思う。

【林健康福祉部長】
・ある意味、関係人口である。

【髙山こども・子育て担当参事】
・例えば、ふれあいサロンで東京の面白話をしてもらうとか、色々な可能性はあると思う。

【中田委員】
・現実的には、親の介護をしていると申告する場所はない。例えば、市役所の窓口で介護の話はしても、誰が介護をするか、その家族関係などまでは踏み込めない話題なのだと思う。こういうタイミングで帰ってきているとか、この日なら動けるとか、話す場があればつながりができて行くと思う。
・子育てが終わり、介護のために飯田に帰ってきている人を、うまく使うことも考えてはどうかと思う。

【山上委員】
・飯田市社会福祉協議会が担っているボランティアセンターは、認知度に課題がある。ボランティアセンターは、ボランティア活動をしたい方から連絡をいただき、困っている方とのマッチングする役割を担っている。先ほど地域活動の担い手が高齢化して不足し活動が衰退しているという話があったが、その解決策の一つとして、地域福祉の担い手を育成する勉強会等を開催するなどの取組を始めている。少しだけなら、一日だけなら、数時間だけなら、という人材をうまく受け入れて行けるような仕組みができれば良いと考えている。

【中田委員】
・飯田市を出て行く人は、だいたい 18 歳くらいでこの地域を離れているので、例えば、飲食店も知らないと思う。人がいる場に行けば情報もあるが、家で介護することに精一杯で、なかなか外に出る機会がないのが現状だろうと思う。そういう人たちが、情報交換をするような場があれば、面白いことができるかもしれないと感じた。
・高校の在京同窓会があり、40 歳台は忙しくて集まらないが、50 歳代くらいになると時間的にも経済的にも余裕が出てくる。この年代は、自分の田舎のために何かしたいと思っている方が多いように思うので、こうした人達の力を地域が使うという視点もあるかもしれない。

【山上委員】
・先ほどお話したボランティアセンターにも、飯田に戻ってきて、時間があるから、何かしたい、何かできることはないのかとお電話をいただき、今現在、地域で活動いただいている方がいる。

【髙山こども・子育て担当参事】
・来ている人からすれば、飯田のことを知る機会になり、私たちからすると情報や知恵が得られることになり、うまくいけば、ウィンウィンの関係になれるかもしれない。

【中田委員】
・今は、60 歳代は働けるし 75 歳くらいまでは、まだまだ動ける方が多いと思うので、そう考えると、地域には人材がいるとも考えられるのではないか。

【菱田委員】
・まずは、そういった方々が集まるような仕掛けが必要なのかもしれない。
・行き来を続けて、地域との繋がりができて、定住につながる方もいるかもしれない。
・例えば、地域を知るためのツアーの組成や、何か一つのことをみんなでやり遂げるような仕掛けをして、地域との繋がりを徐々に作っていく機会があると良いと思う。

【中田委員】
・例えば、介護のために帰郷している人の介護疲れを癒す場があると良いかもしれない。介護のために帰郷している人は、どこに誰がいるのかわからないので、介護だけしてずっと家にいるという人がいるとすると、そういう方々を集めて話をする場を設けることも一つの集まる仕掛けになるかもしれない。
・その場から離れないと、愚痴も言えないような状況があるとすれば、そういう場がその解消にもつながるし、情報交換の場にもなる。

【菱田委員】
・外からの力を借りる視点は、非常に大事な視点だと思う。
・何かの目的で市に帰ってきている人たちのつながりの中から、新たなモノやコトが生まれ、地域の大きなうねりになると良いと思う。

【中田委員】
・市が社会福祉として、やっていることを普段の生活の中では知る機会がない。介護等が自分事になって初めて市役所の窓口に相談にいって、知ることが多い。

【矢澤委員】
・福祉は地域づくりだと思った。全体を俯瞰することは必要だが、それぞれの小さな単位で課題から違う。小さなクラスターから始まることなのかと思う。
・この地域の特性として、誰かがやっていてそれを褒めると、他の人もやり始めるという地域特性があると感じるので、そういう特性を生かすように、小さなクラスターでの動きを全体に広げていく、起爆剤となるモデル地区のような取組が必要なのかなと思う。

・若い人たちは、例えば、支え合いマップの存在を知らないと思う。本当に知らないことが多い。 ・子育て中で働けていないが、社会とのつながりが欲しいという方は結構いると思う。 ・私自身の子育てのことを考えると、同じ子育て中の親がいる子育てサロンよりも、おじいちゃんやおばあちゃんのいるふれあいサロンに行けたらよかったかなと思うところがある。地域の中でつながりができれば、通学路でおじいちゃんやおばあちゃんが子どもたちを見守ってくれるなど、子どもにとっても良いことではないかと思う。 ・福祉を切り離して考えていたが、自分に近いものだということを感じた。 【矢澤委員】 ・私は、楽しいと思う。 ・私たちの世代は、情報過多で、SNS 等の情報から「こうしないといけない」「こうあるべきだ」という、スマートフォンの中での情報からの脅迫に晒されていて、「キラキラ」していないといけないと思わされているところがある。 ・実際には、もっと足下に目を向けると、子育ては地域の皆さんがいないとできないと強く感じているので、そういった意味での地域のベースを作っていくことの方が、親として安心して子育てできる環境になっていくと感じている。 【山上委員】 ・これまで、市内でもそうした取組をしたところがあったが、高齢者の視点で実施されていたところがある。それは、高齢者が増えていき何とかしないといけないということは、地域の誰しもが見ていてわかること、容易に想像できることで、一番取組がしやすい福祉が高齢者福祉である。一方で、障がい者福祉や子育て支援は、若年層とお年寄りの時間がずれている部分もあり、なかなか結びつかない部分がある。わかっているけれども、分野で考えてしまうが故に、これまで、地域福祉の課題として拾い上げることが難しい状況があったと思う。 ・過去にそうした取組を実施していたところも、何回かは実施できるが、お年寄り主体で動いてしまうと、結局、お年寄りだけの活動にシフトしてしまい、親子が入りにくくなってしまったというのが実態であった。 ・現在は、南信濃のコミュニティカフェのように、誰でもどうぞという取組が動きつつあるので、そうした取組の情報を発信していくことは必要かと考えている。また、子ども食堂やりたいという声を多く聞くようになってきており、子	【高山こども・子育て担当参事】 ・地域の高齢者が集まり、お茶を飲んだり、話をしたりしているふれあいサロンが子育てサロンもやっていたら、利用してみたいと思うか。

育て支援が少しづつ、社会の中で見える化されて来ている。従来の方法で、事業を続けていくだけでなく、帰るタイミングを逃すことなく変えていく視点は重要であると思う。

【菱田委員】
・地域福祉は、バラバラでまとめようがないというのが実際ではないか。
・それは、それぞれが当事者でもあるが故に、それぞれのいいたいことやニーズが全体に伝わりにくい、経験や見聞きしたことがないなど本当に当事者にならないと他者がいっていることの意味が分からないことから生じる。
・ただ、ここに来て個の力が落ちてくる中で、いよいよ、一緒にやって行かないと立ち行かないという危機意識が共有され始めたところではないかと感じている。
・施す人、施される人という関係性ではなく、それぞれが活躍し自走しながら課題解決していく仕掛けやそれを共有する器が求められているのではないかと思う。

【高山こども・子育て担当参事】
・どちらかが主催者で、どちらかがお客さんだと続かない。
・それぞれが、それぞれに役割があり、それを共有するような、誰もが主人公という形ができれば、続いていく有意義なものになると思う。

＜基本目標９　20 地区が輝く活き活きとした地域づくりを地域主体に進める＞

【三浦委員】
・天龍峡や遠山地区に移住してきた方の友達が移住してくることがかなり増えているように感じる。若い方々が移住してきて、飯田市に新しい風を吹き込んでくれることが非常に大事。天龍峡や遠山地区のように少しでも活性化できるといい。
・作っただけで終わりにするのではなく、商品開発した後に発信することが大事。飯田の特産として、水引はすごく大事だと思っている。大学との連携した取組で増やしていけるといい。

【福岡委員】
・自治活動組織への加入率や自治会活動は課題が深く、重いと感じた。各地区のまちづくり委員会で実情や状況が違う。今後も自治体の構成人数が減少する中で、組織運営が難しくなり、更に課題が増えることが予想される。委員の選任の方法、組織の再編、事業の見直しは、市としても積極的に関わっていく必要がある。一律にやらなければならないことが難しくなる自治会が出て来る。フレキシブルな対応が必要。自治会の統合やデジタル化をし、自治会運営の負担

【橋本市民協働環境部長】
・商品開発は出口の部分が大事。令和４年度は地元水引事業者と津田塾大学が連携し、車いすのスポーク部分に装着する「Ｍｅ，ｓ（ミーズ）」を共同開発した。引き続き、こうした取組を継続していきたい。

軽減をできるだけ進め、20 年後、30 年後の役員構成も見据えて、参加できるように変えていくことも必要。 【小林委員】 ・自治会の中で子育て支援と地域づくりが最大のテーマ。子育て支援は国の１番の目標。 ・竜丘地区の天竜川を主体にした地域おこしの取組では、人材不足や後継者不足が課題になっている。灯ろう流しの運営も、長年同じ方がやっており、後継ぎができない。地域おこしをして、少しでも人を呼び込みたい、定着人口を増やしたい。３人目、４人目を産めるような子育て支援、人口を減らさない工夫を保育園・幼稚園を巻き込んで悩んでいる。 【増田委員】 ・各地区のカラーや地域性もある。一律に市ができることはあまりない。各地区の住民が自分たちの実情にあった取組をしていくべき。 ・「加入」という言葉は、既にあるものに後から入るイメージ。既存のものに入ることに抵抗がある。 ・公民館もそうだが、人を巻き込んでいく部分はどこかで腰を据えて考えないといけない時期が来る。 ・加入していない世帯の方にどうすれば加入する気になるのか直接聞いてみる。加入ではなく、新しく作るというイメージになるのではないか。 ・５年くらい核になる委員が変わらない時期を作るなど、２年周期の委員では無理。	
【福岡委員】 ・今は自治会運営をボランティアでやっているが、ボランティア活動が限界に近いのかもしれない。仕事として任せた方がいいことを作っていく時期がいるのかもしれない。雇用も生まれる。	【橋本市民協働環境部長】 ・ぜひ参考にさせていただき、検討していきたい。 ・組合に加入していただくための特効薬がない。たとえ組合加入が困難でも、常にお声がけをしていくことが大事。関係を切らさないことで、人と人とがつながっていく。緩やかな関係を作っていきたい。
【小林委員】 ・三重から竜丘地区へ見学に来た方が、ボランティア活動があることに驚いていた。三重では行政がやることだと言っていた。 ・役員が回ってくるので、組合ごと区から抜けてしまうので悲しい。	【橋本市民協働環境部長】 ・環境美化活動のように、身近な活動は隣同士が呼びかけ合って、みんな一緒になって掃除をすることで地域のコミュニティになる。
【増田委員】 ・防災は誰でも関心があり、集まりもいいので、切り口にするのもいい。	【橋本市民協働環境部長】 ・いつ南海トラフ地震が起きてもおかしくない状況の中で、そういったことも

	必要だと感じる。
【杉山委員】 ・「進捗状況確認指標、重要業績評価指標（ＫＰＩ）」について、累計のものと累計ではない指標があるが、表の中で分かるように明記していただきたい。 ・「進捗状況確認指標、重要業績評価指標（ＫＰＩ）」の「④自治活動組織への加入率」の減少が気になった。今後の展開方法で、「引き続き、自治活動組織加入促進を支援する」とあるが、具体的には何をするのか。 ・加入率が減少しているが、市としては今までの支援のあり方に問題はなく、問題は別のところにあるという認識か。	【橋本市民協働環境部長】 ・具体的には、今年の３月に市役所の本庁舎で転入届を出された方に、市で使うごみ袋を配布しながら、自治会活動へのアンケートにご協力いただいた。アンケートの中で、自治会に少しでも関心がある方に対しては、情報提供のご了承をいただいた上で、転入先の地区へ情報提供し、自治会の役員へつないだ。 ・また、各地区単位で組合加入の加入促進に対して、補助金を出している。 ・組合加入促進への支援は支援として続けていきたいが、組合加入率が減少していることは大変重く受け止めている。
＜基本目標 10　個性を尊重し、多様な価値観を認め合い、活動の場を広げる＞ 【三浦委員】 ・「多様性とムトスの行動力でまちづくりを推進」に違和感がある。多様性がなぜここに来るのか。市民活動については基本目標９になるのではないか。	【橋本市民協働環境部長】 ・基本目標を達成するため細分化した小戦略を設定している。その１つ目のテーマとして設定しているもの。小戦略については年度単位で見直しを行うため、検討していく。
【増田委員】 ・千代にある「里山べーす」はまちづくり委員会でやっていた事業をほとんどまちづくり委員会と変わらない構成で独立させた。よこね田んぼだけでなく、古民家改修を行うなど、いろいろなアイディアが出てきている。良い事業は市民活動へ移行していくことが良いと思う。 ・20 地区応援隊のふるさと納税の仕組みがあるので、独立した団体の資金にすればいいと思う。地区によりすごく差があり、活用されていない地区もある。もっと工夫が必要であり戦略を考えていく必要がある。 ・竜丘ではこどもの寺子屋を行っている。すごく良い事業で続けてほしいと思ったときに、思い入れのある人が独立させて支援していけば、もっと先駆的な事業ができるような気がする。各地区でそういったことをやってもらえると良い。 ・飯田市はがっちりといろいろ持っていて離さないため、ＮＰＯが活躍する場がない。そのため、ＮＰＯの数も少ない。一時は指定管理などを多く出していた時もあった。手放している自治体にはＮＰＯも多い。民間の入る余地がないと、ＮＰＯも育たない。指定管理が一部しかないが、そういったところで活用してもらいたい。 ・指定管理を出しても応募できるＮＰＯは少ない。ここまでできれば指定管理を受けられるという基準があれば、ＮＰＯ側も頑張ることができる。基準を満た	【田中ゼロカーボンシティ担当参事】 ・ゼロカーボンシティ推進課で指定管理施設を持っている。指定管理をお願いしていく際には議会の議決が必要となる。施設の設置目的は押さえながらも、地元の地域活動でより有効に管理してもらえる組立てをしなければいけない。施設の公共性を担保しながら、地域活動が共存できる形でどのようにマネージメントするかの舵取りが求められる。様々な意見があり、意見をいただきたいという一方で、その意見をどのように共有理解としていくかのバランスを取っていくことが非常に難しい。

した事業者が指定管理先となれるなど、ガイドラインをしっかりと示す必要がある。 【福岡委員】 ・ＮＰＯの「いなだに竹Ｌｉｎｋｓ」が、円悟沢まわりの竹林が繁茂し不法投棄も問題になっている箇所の竹林整備を行っている。鵞流峡プロジェクトや地域課題解決というだけではそこまでできない。法人化した「いなだに竹Ｌｉｎｋｓ」が、収益も得られる形で取り組んでくれているためできているのだと思う。企業にも声をかけていただき、企業とボランティアなど多様な主体で取り組むことにつながった非常に良い事業だと思う。 ・独立した団体というのは、能力のある方が、任期の間だけでなく取り組んでもらうための大切な考え方だと感じた。 ・自治会運営が難しい実状があるなかで、ある程度行政が業務として吸い上げていくことはするべきだと思う。業務として民間やＮＰＯなど外を活用し、住民に見える形で評価していくことが理想的。 ・昔のように、トップダウンで指示が来て、その指示にみんながベクトルを合わしていくような時代ではなくなっている。個々が能力を出し合って、それを結集させうまくベクトルを合わせて事業へもっていくような、中間マネージメントやトップマネージメントしながらボトムアップ的に進めていくやり方に会社企業は変わってきている。個性を認められるような組織体制に徐々に変えていかなければいけない。 【小林委員】 ・社員はいろいろな考え方がある。建設会社だと、毎回作るものが違う、毎日条件が違う中で、常に一番大切なのは個々の考え方や個性を大事にしながらのチームワーク。 ・自治会を振り返ってみると、いろいろな考え方の各区長がいる中で、どうやったら永らえられるかをみんなで日々考えている。 ・ムトスは、補助金をくれる良い仕組みだと思うが、市とすると補助金を配っていればなんとかなるという考え方なのか。みんなで良くなっていくのはとても難しい。 ・市で施設を作ってくれるから、ただ民間で指定管理すれば良いとはならない。指定管理先の能力がとても重要になってくる。スタンダードとするガイドラインが必要だとする話はその通りだと思う。 ・オンブズマン制度や市民が行政の能力を査定するようなことはあるか。	【橋本市民協働環境部長】 ・非常に良い意見をいただいた。基準を設けることも必要なこと。 ・オンブズマン制度は、情報公開制度が始まるときによく話題に上がっており、現在もあるが、最近あまり聞かなくなった。 ・若い人の活動のきっかけづくりに有効に助成金を使ってもらえると良い。それが活動の成長につながってくれることを期待している。 【田中ゼロカーボンシティ担当参事】 ・市民評価のプロセスは、試してみると良いかもしれない。

【三浦委員】 ・チャレンジ助成といった、小口だが門戸を広くしていろいろなことに取り組んでもらう補助があり、高校生が探求の時間で地域の発展等を考えて、その発展性があるものに活用するといった広がりが生まれてきている。こういうことができるという体験が力になって裾野が広がっていけば、一度飯田を離れても帰ってきてくれるように変わっていくと思う。 【小林委員】 ・高校生でも中学生でも良いので、若い人をどんどん使っていくことが大切。若い人が何かをやりたいとしたときに、ムトスのお金を落とせる。そういう体験をしてもらうことが大事だと思う。 【三浦委員】 ・失敗しても良い。みんなの前で発表することで、子どもたちのレベルも上がる。成果は求めず、ステップを踏んで成長していくところ見ていくことが、大事だと思う。 【杉山委員】 ・女性委員の比率について、毎年目標を達成していることは素晴らしいことだと感じる。この委員会も女性委員が多く、活発な意見が出ていてとても良い雰囲気で開催されている。なかなかこのような委員会はなく、目標も達成できているので、目標を引き上げてもいいのではないか。 ・自治活動について、株式会社を立ち上げたという事例もある。行政を自治体だけがやっていくのではなく、アウトソーシングしていくことが良いのではないかということで、北海道のニセコ町では、株式会社ニセコ町を作って、そこに出せるものは出していくようにしている。飯田市のように住民の力があるところであれば、チャレンジしても良いのではないかと思う。 【小林委員】 ・私の自治会では 20 人全員が男性になっている。各区でみても区長はほとんど男性。女性はほとんどいないので、早く自治会長に女性が出ると良い。ぜひ女性の活躍の場を広げてもらいたい。 ・女性委員会を作るよう行政から指示があって作っているが、今は何をしたらいいか分からない。仕事がない。 【増田委員】 ・これまで女性がそういう場に出る機会がなかった。今になって求められても困	【橋本市民協働環境部長】 ・目標については、現状を鑑みて、上を目指していきたいと考えている。

る部分がある。年代によって大きく違う。 【小林委員】 ・自治振興センターには必ず女性がいて、彼女たちを見ているととても素晴らしい。彼女たちが歳を重ねていって、自治会に積極的に入ってきてもらいたい。 【三浦委員】 ・女性委員があるがために、女性が育たたないということもあるかもしれない。必ず組織しなければいけないのか。まちづくり委員会の中で決めていけば良い。 **＜基本目標11　地球環境への配慮が当たり前の暮らしとまちづくりの推進＞** 【福岡委員】 ・地域ぐるみ環境ＩＳＯ研究会は環境をテーマに活動している。二酸化炭素、地球温暖化貢献度への意識の高まりを身に染みて感じている。昨今の状況を見ていると、やり過ぎている感がある。太陽光発電を動員しても、カーボンニュートラルは達成できない。今の太陽光発電の技術レベルでフル活用して、本当にみんなハッピーになるか。太陽光パネル製造を 100%海外に依存している日本の産業の視点では明るい未来とは言い難い。本当に今のままで進んでいくことがいいのか。 ・技術革新を待つ一方で今すぐやらなければいけないこともある。空き家の活用については、エネルギー効率の良い空き家なのか評価して、ちゃんとした家に住むことを促す必要がある。これからは間違いなく今以上に気候が厳しくなる。災害に強い地域なのかという評価も必要。行政の力で安全なところに住むように促す。できるだけ安全安心な場所に作ること。災害が起こると復旧しないといけない。住むべき土地なのか峻別して促すことをすぐにでもやらなければいけない。 ・「うごくる。」のカードゲームに参加した。一発肥料の周りはプラスチックでできており、最終的には海に流れていく。できるだけ早い段階で止めていく取組が必要。今までのような農業のやり方はどうなのか。窒素酸化物も地球温暖化に影響する。肥料をやり過ぎると窒素酸化物になってしまうため、本当に必要な肥料なのか峻別すること。そういう働きかけを行政からするといい。 【増田委員】 ・家庭によってごみの考え方に差がある。ごみ袋が高くて買えない、分別の仕方が分からないお年寄りがいる。	【田中ゼロカーボンシティ担当参事】 ・まちづくり委員会によって設置される組織は異なる。

・ここ数年で気候が激変している。時流にあった施策をその都度考えていかないといけない時代になってきている。 【杉山委員】 ・この戦略の考え方に生物多様性やフードロスといった脱炭素以外の部分も入って来てはいるが、計画改定の際には、その分野の指標を入れていく必要がある。生物多様性については、他の基本目標にもなかった。ぜひ地球環境のところに入れていただきたい。飯田の価値として、自然の豊かさというような指標を入れていくと良い。 ・フードロスについて、基本目標３の食育には原材料のことばかり記載があるが、食べ物を残さないことや消費者の買い方も含めた食育になるといい。 ・「うごくる。」すごく素敵だと思った。環境教育も重要だが、気候変動のスピードの方が早い。みんなでできることからやるという時代ではなく、できることを全てやっていかないといけないという危機的な状況。再生可能エネルギーの導入という点では、飯田市は全国的に見るとトップランナー。ぜひどんどん推進していただきたい。 ・取組の成果に数値が記載されているが、この値の評価として、良いのか、まだ足りないのか分からなかったので、追加の説明をしていただきたい。 ・「うごくる。」で環境文化都市の理念を共有する考え方は素晴らしいことだと思うが、更に次のステップを視野に入れていただきたい。例えば、条例を作る、市のルールを作るということをしていかないと、一人ひとりの意識だけに頼っていては間に合わない。他の自治体では本気になった条例を作っているところもある。今の時代の環境教育は、新しい制度やルールを作るのに反対しない、むしろルールを作ってほしいという市民を作るためのツールにしてほしい。市のルールが「うごくる。」から提案されていくと良い。 ・ごみの指標が目標値を上回っている。何らかの対策を考えていかないといけない。個人的にはコンポストをやっているが、ごみの量がすごく減って楽。まちの中の緑を作るという観点で、市民団体と一緒に考えてやることもできるかもしれない。基本目標 11 はいろんな基本目標と親和性がある。どうマッチングしていくか、デザインしていくかが面白味でもある。市民活動や地区活動に上手く関連付けていくと良い。 ・牛の糞の処理に困っていたが、バイオガスにして発電することで、市が電力会社を作り売電し、バイオガスを作った時にできた液肥は有機肥料にして農地に戻すといった循環型農業にしている自治体もある。地域の資源をいかに循環させるか、使い尽くすことを検討していく時代になっていく。 ・基本目標 12 の防災分野においては適応策の記載が見られるが、他の基本目標では記載がない。適応策の視点で目標や指標について、次の計画作りの際に	【田中ゼロカーボンシティ担当参事】 ・気候変動や生物多様性については、後期計画へ確実に入れていきたい。 ・フードロスの消費者側の対応について、きちんと意識したものを、他の基本目標との連携をきちんと構築し組み立てていきたい。 ・適応策について、都内に比べると当市は涼しく過ごしやすいので、逼迫した適応策はリアリティを持って受け止められにくい。後期計画を作成する際には課題を明確にし、議論を深めていきたい。 ・「うごくる。」で取り組んでいる活動をきちんと条例化し、課題に沿ってルール化すべきというご意見も了解した。今までの実績もあるので、本質的なアプローチをきちんとしていきたい。 ・ごみの排出が進んでいない件について、委員指摘のとおり他の基本目標との親和性もあり、課題として受け止めている。新年度は生ごみ処理機の補助を拡充することを検討している。生ごみを地域循環させる地域システムというかたちで取り組んでいけるよう、新年度又は後期計画に向けて考えていきたい。 ・指標数値については、概ね計画通りに進捗できている。二酸化炭素排出量が 2005 年との対比で 2030 年に半分になる計画で進めている。

課題にすると良いのではないか。

【福岡委員】
・杉山委員にお聞きしたい。これから気候変動に関わる技術革新が必要。この地域で寄与できる取組はあるのか。

【杉山委員】
・技術革新について否定はしない。そういったところも期待はしたい。新しい技術が一般に普及するまでには時間がかかる。実用的な値段になるまでに、何年もかかるため、一般的には導入が難しい。並行して進めるべきで、それだけに頼っていては間に合わない。あらゆるできることを今やらないといけない。省エネ、再エネも大事。これまでの化石燃料の社会を卒業し、新しい社会のためのインフラに切り替えていかないといけない。私たちが今使っているインフラは全部化石燃料ベース。私たちの世代は次の世代のために、ベースを再生可能エネルギーで考えたまちや社会に切り替えていかないといけない。今あるものを総動員し、早ければ早いほど良い。それを「うごくる。」でやっていただきたい。

【福岡委員】
・企業の産業に関わっている立場として、杉山委員にお聞きしたい。企業もより良い社会にしていくことを目標としている。課題解決が使命であると考えている。今、技術革新が必要で、地域でも技術革新に寄与できるような取組はないか。民間の企業として、こういう技術を研究した方が良いなど。

【杉山委員】
・膨大なテーマでここでは簡単に答えられない。企業活動が重要なのは分かるが、ＳＤＧｓのウエディングケーキモデルを考えると、一番のベースは地球環境。それが成り立たないと企業活動も成り立たない時代。社会課題の解決はもちろんだが、地球環境課題の解決にも取り組まないといけない時代。それのための技術革新は、これからビジネスチャンスになる。環境負荷を与えていく事業はこれから淘汰されていくという社会に変わっていくと良い。

【福岡委員】
・いいだ未来デザインの産業や経済のテーマに入れていただけると良い。

【杉山委員】
・ぜひ入れていただけると良い。

・若年層が減っていくことにより、大学も学生の取り合いになる。そういった中で、敢えて大学というのは、チャレンジング。学生を呼べる自信がないと難しい。そういった背景を考えると、大学でなくてもいいと考える。例えば、誰でも学べる、誰でも学び直せる学校があるといい。オンラインを使った魅力的なカリキュラムを作成し、飯田だからこそ、そういう学校があって受け入れられるという場所を作るとひとつの魅力になる。環境を学べるグリーンスクールという学校があってもいいと思う。 【三浦委員】 ・杉山委員のお話を聞いていると、待ったなしの時代だと感じる。日本はＥＶ車を使っているが本当にエコなのかというテーマの番組を見た。電気を火力発電で作っているので、電気を使用する車が本当に日本においてメリットがあるのか。10 年経たないと元が取れないという話だった。奥が深い環境の問題だと思う。大事だとみんな実感しているが、切羽詰まっている状況だと実感してもらえるように市として広報した方が良い。飯田市はいろんなことに関して、広報が進んでいないと思っている。広報が大事だと思う。 【小林委員】 ・環境は１番大事なことのひとつだと思っている。建設業をしているので、二酸化炭素の排出が大変多い。温暖化やごみ処理についてどうできるか。少しでも地球に優しい仕事ができるように、みんなで考えたい。家庭では、できるだけ生ごみを自宅で処理している。	
＜基本目標12　災害や社会リスクに備え、社会基盤を強化し、地域防災力の向上を図る＞ 【河野委員】 ・建設業をはじめとしてあらゆる職種で人材不足が言われている。令和４年度に行ったお仕事図鑑やプロジェクトの取組で十分であるという認識か。 ・休みが少ない、給料が少ない、大変そうに見えるといったことが、敬遠される原因と言われている。企業は、人がなかなか集まらないなかデジタル化や機械化に取り組むことで省人化を進めている。市でデジタル化や機械化への支援に取り組んでいく必要があるのではないか。	【岡本危機管理部長】 ・人材不足という課題認識の上で、取り掛かったところ。今後については、なぜ人材不足に陥っているのかの原因分析も行い、職場環境の改善を進めて、担い手不足の解消を目指していく。これから本格的な検討に入っていく。 ・デジタル化や機械化に取り組んでいく必要について貴重な意見をいただいた。プロジェクトの中でも検討させていただく。
【中村委員】 ・消防団が敬遠されている。災害時の安全安心は、地域の知った顔が助けてくれる環境づくり、人と人とのつながりがとても大事。消防団に入るハードル	【岡本危機管理部長】 ・消防団員は全国的にも飯田市としても年々減少傾向にある。消防団としても、操法が一定期間夜遅くまで訓練することなどの問題は認識している。操

を下げることが重要。地域の人全員が２～３年消防団に入って、防災の知識を得たり、顔を知ってもらうことで、有事の際に助けあうことができる。特に中山間地域では大事になってくる。 ・何が一番ネックになっているかというと操法。なかなか操法の訓練に参加する時間をとることが難しい。一人ひとりの資質を上げていくのではなく、資質を下げてでも、一人でも多くの人が知識を得ていくことに取り組むべきで、地域防災のあり方に変えていく必要がある。未だに敬礼をしている消防団という地域組織は異質である。若い人が気楽に入って、防災知識や地域の顔を覚えて、地域を守っていくような、ラフなつながりにしてあげてもらいたい。職場からとすると、協力はしたいが、出しづらさもある。 ・操法大会がなければ、地域と一緒に防災訓練をして、ポンプの操作や水出しの訓練、怪我の救護などを覚える取組ができる。消防団という組織は入っている人たちで固まってしまう印象もある。検討を進めていただきたい。	法が、上位をとることが目的ではなく、だれもが機材を安全に扱えるようになることを主眼にしていくことも検討している。練習の時間や日数に制限をかけながら行っているが、まだまだ抵抗を感じている方がいる。行事においても省けるものは省くなど消防団本部とは話をして、団員の確保に努めている。有事の際には、しっかりと活動していただいており、非常に大切な組織である。各地区のまちづくり委員会等とも、意見交換する機会を設けるなど団員確保に努めてまいりたい。
【今井委員】 ・消防団も準団員のような気楽なところから入れたらよかった。重責を担うのではなく操作が分かる程度から導入としては入れると良い。段階的に水出し等を覚えていくような柔軟な入口があれば、準団員という呼び方ではないかもしれないが、入りやすいと思う。 ・ＳＮＳや動画などで表現していくことができる。言葉では言い表せられない魅力の発信も考えていくことが必要なのではないか。 ・防災の観点では、防災の日に地区での避難訓練を毎年行っている。班長から組長に連絡が入り、組長から組合の家に伝達される仕組みになっている。ただ、実際の災害で同じことができるのかと疑問に思う。会社の経営者であれは自分の会社に行かなければいけない。やっている意味や価値が、地域の連携をとることであれば良いと思うが、実際の災害時を想定できているのだろうかと思う。 ・集合場所に集まれば、人員の確認はできるが、物資が届くような連携はできていない。物資が集まり、救護してもらえる場所へ集まることが大事だと思う。自分からそういう情報を拾いにいっていないが、どこに物資があって、避難すればいいのかを知らない。命をつなぐ情報をもっと発信周知していく必要がある。	【岡本危機管理部長】 ・支援物資は指定避難施設である小中学校に、主に届くことになる。指定避難施設には備蓄倉庫もあり、数日間過ごすことのできる備えがされているが、長期化した際には、必要な物資を小中学校の他、避難している場所へも運び込むことになる。 ・各地区で毎年訓練をお願いしており、内容についてはそれぞれで計画を立てて実施していただいている。市からは、実際に避難所を開設するところまで依頼している。今回は、一時的な避難所で安否確認することの訓練を行ったということだと思う。それぞれの避難の仕方がある中で、情報はしっかりと発信し、周知していきたい。 ・役員の代替わりがあることで、自主防災のリーダーが作りにくいという課題認識を持っている。
【福澤委員】 ・消防団も建設業の担い手の問題と同じで、これから増えていくことはないのではないかと思う。そうだとすると、どこかで抜本的な取組が必要になってくる。その際に、消防団が実際にどの程度消火に貢献できているのかを把握	【岡本危機管理部長】 ・現在は第 12 次消防力（消防団）整備計画に基づいて、機材の配備等含めて進めてきているが、あと２年ほどで更新時期を迎える。13 次の計画策定に向けて、消防団を今後どのようにしていくか検討を進めていく。

し、意義を明確にしていくことも大事。
・山間地域では、広域消防が火事場になかなかたどりつけないことがあるとすると、重要性は高いと思う。そういった地域ではどう担い手を確保していくかが問題となる。
・意義を明確にしたうえで、今後のあるべき姿を議論していくタイミングに来ているのではないかと感じた。
・防災については、啓蒙と周知手段が重要であると思う。段ボールでのジオラマなどいろいろな形での啓蒙活動を行われているため、なにが効果的かはあると思うが、継続してもらうことが大事。周知手段については、複合的な仕組みは必要ではあるが、それぞれが市民にどの程度リーチしているのかを計られているか。平時の情報取得と有事の情報取得について、どの媒体が効果的であるのかを把握しておくことが大切だと思う。

【竹内委員】
・消防団には、人数の問題がある。今後増えていくことが見込めない中ではあるが、火の消し方を含め防災の知識は誰もが知らないといけないことだと思う。市民全員が知識を持つこと、その必要性を認識することが大切。そういった意識を高めていく必要があると思う。
・防災について、自分が組長の際の訓練時は、集合場所に集まって点呼をとることぐらいしかできなかった。実際の有事の際になにができるのかシミュレーションしておくことが大切。情報をどのようにとっていくのか、伝達手段はなにが良いのか、アクセスできるのかは、事前に知っておくことが大事だと思う。
・建設業の担い手不足は全体に通じる話であり、人口も減少していく中で、担い手を確保していくための広報活動はとても大切。ＤＸといったことも踏まえながら今後もう一歩進めていくことが必要になってくると思う。

【中村委員】
・防災の情報を取りに行くことは基本的に無理。防災無線が一番使われている理由は、情報を取りに行かなくても情報をくれるからだと思う。台風情報などに合わせて、地区ごとどこに物資があるかの情報を送り込むことができると良い。地区の誰かが知っていれば、情報は伝達することができる。どこになにがあるかは情報をもらえるとありがたい。

・消防署との関係性、支援団員の拡大、機能別団員の拡充など、いろいろな方面から本気で考えていかなければ厳しいという状況がある。
・いただいた意見を参考にしながら進めていきたい。
・防災に関する情報取得については、市民意識調査で確認している。防災無線からの情報取得が多く、テレビやラジオからも取得されている方が多い。
・クロス集計から年代による特徴、また、毎年の調査を行うことで時代による変化についても確認をしている。
・防災無線の他に情報取得の手段があることを知らない可能性もある。多様な情報取得方法があることの周知や情報発信が必要であると認識している。

【岡本危機管理部長】
・防災については、平時にどれだけ各家庭において避難などの備えをしてもらえるかが大切であり、備えをしてもらうための情報発信の仕方を考えていきたい。
・担い手不足については、プロジェクトのなかで検討していく。

【企画部長】
・人口減少が進む中で組織をどうしていくかという話は、組織論の話から入ってしまうと人不足に突き当たる。機能面など、どうあるべきかという視点から整理していくことが大事だと感じている。
・教育委員会では、学校の再編ではなく、学校のあり方研究会を行っている。学校の組織をどうしようという議論ではなく、子どもにとっての教育はどうあるべきかという議論から整理をしていく。
・いただいたご指摘は、そういった大きな流れのなかでのご意見として受け止めさせていただいた。

【岡本危機管理部長】
・一番に防災無線ということは確かにあると思う。平時の中でも情報をしっかりと示すことができるようしておく必要がある。避難所開設の情報などは送信している。

【岡本危機管理部長】
・防災については、ハードとソフト面の両方を充実させていく必要がある。ハー

	ド整備は計画的に実施していくことになるが、防災意識をどのように持ってもらうかがとても重要となる中で、ソフト面の事業をどのように展開していくか検討していきたい。
＜基本目標13　リニア・三遠南信時代を支える都市基盤を整備する＞ 【福澤委員】 ・２次交通について、エリア内循環型オンデマンドの乗り合いタクシーを全国でやっている。直近では、岐阜羽島で導入しており、選択肢の１つとして提案させていただきたい。 ・デジタル化について、ハード整備は進めているところだと思うが、同時にソフト面である人材育成がとても重要だと思う。自治体では研修程度にとらえられがちなところがあり、経費としての気後れ感があるが、人的投資として考えてもらいたい。ハードとソフト面の両面で注力していく必要がある。	【小倉リニア推進部長】 ・地域公共交通については、「2024 年問題」もあり、運転手の人材確保が非常に難しい状況にある。本数を減らさずに路線のあり方をどうするか、運行形態について検討している。 ・良い提案があれば、改めて内容をお伺いしたい。 ・デジタル化において、職員の人材育成は必須と考えている。 【林企画部長】 ・デジタル技術をどのように社会や暮らしの中に入れていくか。デジタルを自分の仕事にどうやったら活用できるのかという視点で考え、デジタルに置き換えていくことが必要だと思っている。 ・昨年は全職員を対象にデジタル人材としての能力がどの程度あるのかを調べるアンケート調査を実施している。 ・「デジタル人材」として、デジタル知識を活用しデジタルによる仕事の改善をしていくこと、または仕事そのものを変革していくことができるデジタル人材が、能力別にどの程度いるのか確認している。 ・デジタル人材育成には研修が必要で、調査結果を活用しながら、管理職対象の研修や、全体の底上げをする研修、また、デジタル人材として適性が高い職員には、もっと能力を高めてもらうなど、階層別の研修を考えている。市の職員がデジタル活用の視点を持ち、各分野で多様な人と関わっていく中でデジタル化の推進を図っていきたい。
【河野委員】 ・リニア、三遠南信時代という基本目標において、観光客を何万人呼び込む想定をしているか。また、移住の想定人数は。	【小倉リニア推進部長】 ・リニアの駅での乗降客数は、一日あたり 6，800 人を想定している。そのうち来訪者は 3，900 人。さらにそのうち観光目的の来訪者は 2，400 人、ビジネスなどでの来訪者は 1，500 人と想定している。 ・移住者数の想定までは行っていない。
【河野委員】 ・どのようなまちづくりをすることでそれをもっと増やしていくことや移住者	【小倉リニア推進部長】 ・土地利用の計画自体を、各種土地利用計画の図面を重ねる中で課題を抽出

を他地域からどれくらい増やすかなどは考えているか。
・印象としては、駅周辺には駐車場がすごくあり、飯田から出ていく人にはとても便利だが、飯田に来る人にとってはどうなのかと思う。
・リニア中央新幹線の開通や三遠南信自動車道の開通は、大きなチャンスである。それをどのように生かしてこの地域を発展させていくのかをあまり感じない。わくわく感がない。これで観光客を呼び込むことができるのかと思ってしまう。
・飯田はこの地域の中心都市。観光都市と中心都市の両立をしなければいけない。どのようにしていきたいのか伝わってこない。
・人を呼び込まないと意味がないと思う。駅や駅の周りの施設をもっと考えなければいけない。
・行政はコンセプトだけ示して、デベロッパーにプロポーザル形式で提案してもらった方がいいのではないかと思う。行政だけでは既存の考え方に押しつぶされてしまって、一番大切な「人を呼び込む」ことができなくなってしまう。なにを一番やらなければならないかが分からない。

【河野委員】
・何のためにハード整備を行うのか。年間 87 万６千人程度ではなにも変わらない。100 万人単位で人が集まる整備計画でなければ意味がないと思う。
・長野県はすごく人気がある。もっと人が来る。志が低すぎる。少なくとも 300 万人来させるためにどうしていくのかを考えていかなければいけないと思う。
・リニアの駅自体がもっと魅力的にならないと人は集まらない。リニアの駅に人が集まらないと、他の地域へ行く人もいないのではないか。

【中村委員】
・飯田市には、そもそもリニアの駅周辺を開発していく意思はない。中心市街地にどうやって人を集めていくかが基本的な考え方。そのことをもっと理解してもらうと分かりやすい。リニアの駅はアクセスにしか使わない。丘の上を始めとして、地域に人が来てもらうためにどうするかという話になれば、２次交通をどのよう整備していくのかということになる。
・この駅の絵だけを見ると、駐車場しかないような魅力のない駅に見えてしまう。魅力のない駅であっても、他の魅力のある地域へつなげていくように見せていかなければいけない。ただこの絵だけを見てしまうと、駐車場しかなし、見直しているところ。その中で、移住者ということも視野に入れて検討していく。移住を増やす取組は、全体的な土地利用の方針と、基本目標２での取組と連携して進めていく。

【牧島リニア駅周辺整備担当参事】
・現在は道路や大屋根などを計画しているが、駅の建物も含めてこれから検討していくところであるため、活用方法についても今後考えていくことになる。本来は、ソフト面についても同時又は先行して実施していくところだが、道路整備に時間がかかることからそちらを先行して進めているところ。
・今年度から観光の視点も含めた駅の活用やそれぞれの地域へいざなっていくための検討を進めてきている。
・リニアの駅が住宅地にできることから、佐久平駅のような面積が確保できない中で、駅機能部分に面積を取られてしまう。機能的には抑えていきながら、情報発信をして各地区へいざなっていくことが課題となっており、その検討を始めている。

【小倉リニア推進部長】
・どういうことで人を呼ぶかということになる。大型商業施設等を建設すれば人が集まるかもしれないが、それではどこにでもある駅と同じであり、飯田市の特色が無くなってしまう。飯田市の特色は、自然があって眺望が良く、飯田市だから楽しめる眺めがあること。そういったところを生かせる施設について検討している。
・リニアの駅周辺だけに人が集まれば良いというわけではなく、他の地域へ来訪者を誘うための２次交通のあり方なども検討していかなければいけない。
・リニアの駅の魅力をどのように引き出していくか考えていく必要がある。
・資料にある図面は、土木の実施設計での内容となっており、駐車場しかないようなイメージとなっているが、建築物は今後検討していく。

【小倉リニア推進部長】
・リニアの駅を降りて、観光地や中心市街地にどのようにアクセスしていくのかについて、自動運転などを検討しているところ。リニアビジョンの中では三重心として、その役割を明確にしているともりではあるが、分かりにくい部分があると思うので、しっかりと説明できるようにしていきたい。

くて、そこには他の自治体の観光バスが停まっていて、来た人を持っていかれてしまうような気がしてくる。心配になってしまう。	
【今井委員】 ・細かい話ではなく、大枠で議論するべき。行政としては、ボトムアップでいろいろな意見を反映し、合意を取りながら進めてきていると思う。 ・雑ぱくな話をすると、飯田らしさみたいな話もある。焼肉の話も含めて、飯田らしさを全部拾っていこうとするとなにも伝わらない。 ・飯田の特徴として、東京名古屋から１時間で来られるようになれば、海外からも人が来られるようになる。ある意味では日本の中心的位置づけにもなってくる。国際会議を「自然豊かな飯田で落ち着いて穏やかに」をキャッチフレーズに開催してもいい。世界から見ても中心的な位置づけができればおもしろい。行政の力も借りて人を世界から呼んでくるというようなメッセージが伝わることが大事。人が来るという夢が持てれば民間の投資も出てくる。「いろいろあるよ」ではなくて、インパクトのあるものを見せていけたら、わくわくできるのではないかと思う。引っ張っていってくれる人のインパクトも重要。	【小倉リニア推進部長】 ・世界を視野に入れながら、プロジェクトの中で飯田市の魅力を伝えていくためのブランディングやリニアの整備効果を市内や下伊那地域へどう波及させていくかの検討をしている。また、信州大学とも共同研究をしている中で、どのように飯田市の魅力を発信して行くのか検討を行っている。 ・なかなか地元に住んでいると、外の人への魅力を自覚しにくく、また、共同研究を進めていくと様々な魅力があり、絞り切れていない現状がある。 【牧島リニア駅周辺整備担当参事】 ・飯田らしさがなにかをなかなか打ち出していけていない。焼肉については、かなり浸透してきている。 ・外に向けた打ち出し方は、何かに特化した形のやり方も必要になってくるかもしれ　ない。事業者や市民の皆さんとしっかりと検討していきたい。
【竹内委員】 ・住宅地の中に駅を作らなければいけないという状況で、用地買収に苦労する中、コロナ禍もあり、土地利用、開発、景観などがこれから本格的に進んでいくという認識。 ・わくわくする部分が市民目線では必要だと思う。ＧＸ、環境、サステナブルなど、この閉鎖的な地域は、電気や水といった循環型の経済を作っていくのに適していると思う。 ・そういったことも含めて佐久平のような大規模な開発をしていくことが難しいことは理解している。一方で、大規模な開発を求めている人も大勢いる。リトル東京を作れば良いのではないということを、しっかりと情報発信をしていくことが大事だと感じる。 ・デジタル推進課を中心にデジタル化に取り組まれている。せっかくデジタルツールを活用しているのであれば、もっとそのことを発信していくことが大切。リニアが通るときに、キャッシュレスやデジタル広告が普通なまちでなければいけないと思う。市民の意識が変わっていくよう進めていけると良い。	【小倉リニア推進部長】 ・リニアの駅周辺についても、環境ということはしっかり意識して、再生可能エネルギーを活用した駐車場の設備などに取り組んでいきたいと考えている。 ・建設地が住宅地の中という条件で、生活している方々に移転をしていただいたうえで、限られた土地を活用していく必要がある。その中で、グリーンインフラを活用しながらイベントができる施設を作るなど、地域の皆さんに気軽に使ってもらえる駅にしていきたい。また、外からも来てみたいと思ってもらえる駅を目指して取り組んでいきたい。多くの方の意見を聞きながら進めていきたいと考えている。 ・ＤＸについてはこれからという部分もある。発信や周知も含めてしっかりと取り組んでいきたい。 【小倉リニア推進部長】 ・リニアの駅については、分かりやすく表現しアピールしていきたいと思い取り組んでいる。 ・飯田の魅力についても、焼肉を始め多くの魅力がある中で、多くの皆様の意

	見を伺いながら、検討していきたいと考えている。 ・再生可能エネルギー発電設備を駅周辺に設置し、活用していくが、災害時にも使えるような整備としていきたい。 ・リニア中央新幹線及び三遠南信自動車道の開通に向けてしっかりと取り組んでいく。